

# エジプト学研究第 24 号 2018 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.24, 2018

## 目次

### 〈調査報告〉

- 2017 年 太陽の船プロジェクト 活動報告 …………… 黒河内宏昌・吉村作治 …… 3
- 第 10 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報  
…………… 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・高橋寿光・福田莉紗・米山由夏 …… 11
- 第 26 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報  
…………… 吉村作治・河合 望・近藤二郎・苅谷浩子・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 36
- 第 3 次北サッカー遺跡調査概報：踏査・測量・探査報告  
…………… 河合 望・三井 猛・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光  
…………… 梅田由子・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 48
- 第 3 次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査  
…………… 河合 望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 82
- エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 24 次調査—  
…………… 吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・柏木裕之・山崎世理愛・石崎野々花・有村元春 …… 113
- Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North:  
Discovery, Conservation and X-Ray Analysis  
…………… Sakuji YOSHIMURA, Masahiro BABA, Ken YAZAWA, Richard JAESCHKE and Masayuki UDA …… 158

### 〈研究ノート〉

- エジプト出土のミケーネ土器再考 …………… 有村元春 …… 178
- エジプト中王国・新王国時代におけるペクトラルの副葬にみられる変化：  
ダハシュール北遺跡出土資料を用いた考察 …………… 山崎世理愛 …… 203

### 〈資料紹介〉

- メロエの衰退をめぐる研究の現状と課題 …………… 坂本 翼 …… 229

### 〈動向〉

- スーダン考古学文献解題—我が国の学問的歩みを理解するために—…………… 坂本 翼 …… 242

# The Journal of Egyptian Studies Vol.24, 2018

## CONTENTS

### Field Reports

- Report of the Activity in 2017, Project of the Solar Boat  
.....Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA ..... 3
- Preliminary Report on the Tenth Season of the Work at al-Khokha Area  
in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition  
.....Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI,  
Nozomu KAWAI, Kazumitsu TAKAHASHI, Risa FUKUDA and Yuka YONEYAMA ..... 11
- Preliminary Report on the Twenty-Sixth Season of the Work at Northwest Saqqara  
by the Waseda Egyptian Expeditions  
.....Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Hiroko KARIYA,  
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA ..... 36
- Preliminary Report on the Third Season of Archaeological Survey at North Saqqara:  
Archaeological Reconnaissance, Mapping and Geophysical Survey  
.....Nozomu KAWAI, Takeshi MITSUI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,  
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuko UMEDA, Yuka YONEYAMA,  
Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA ..... 48
- Preliminary Report on the Third Season of Archaeological Survey at North Saqqara:  
Archaeological Work  
.....Nozomu KAWAI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,  
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA ..... 82
- Preliminary Report on the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fourth season  
.....Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,  
Seria YAMAZAKI, Nonoka ISHIZAKI and Motoharu ARIMURA ..... 113
- Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North:  
Discovery, Conservation and X-Ray Analysis  
.....Sakuji YOSHIMURA, Masahiro BABA, Ken YAZAWA, Richard JAESCHKE and Masayuki UDA ..... 158
- ### Articles
- Mycenaean pottery found in Egypt: Revisited .....Motoharu ARIMURA ..... 178
- Changes in the Use of Pectorals between the Middle Kingdom and the New Kingdom  
.....Seria YAMAZAKI ..... 203

## 調査報告

# エジプト ダハシュール北遺跡調査報告 — 第 24 次発掘調査 —

吉村 作治\*<sup>1</sup>・矢澤 健\*<sup>2</sup>・近藤 二郎\*<sup>3</sup>・柏木 裕之\*<sup>4</sup>  
山崎 世理愛\*<sup>5</sup>・石崎 野々花\*<sup>6</sup>・有村 元春\*<sup>6</sup>

## Preliminary Report on the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fourth season

Sakuji YOSHIMURA\*<sup>1</sup>, Ken YAZAWA\*<sup>2</sup>, Jiro KONDO\*<sup>3</sup>, Hiroyuki KASHIWAGI\*<sup>4</sup>  
Seria YAMAZAKI\*<sup>5</sup>, Nonoka ISHIZAKI\*<sup>6</sup>, Motoharu ARIMURA\*<sup>6</sup>

### Abstract

The joint expedition of Higashi Nippon International University and Waseda University, under the direction of Prof. Dr. Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa as a field chief, carried out an excavation at Dahshur North from January 24th to February 23rd in 2017. In this season, the area located to the northeast of the tomb-chapel of Ipay was investigated. The area measures 15m north-south by 25m east-west, and 16 shaft tombs and 1 surface burial were identified. 12 shaft tombs were cleared, among them 6 tombs (Shaft 134, 138, 139, 141, 143, 145) appeared to be the Middle Kingdom burials, and 2 tombs (Shaft 137, 142) were clearly dated to the New Kingdom. Since the finds suggest relatively earlier date than the other parts of this cemetery both in the Middle and New Kingdom, the result will shed a new light on the earlier part of the history of Dahshur North cemetery in those two periods.

### 1. はじめに

ダハシュール北遺跡は、衛星リモートセンシングを活用した調査によって 1995 年に発見された (図 1)。その後の発掘調査により、新王国時代の人物「イパイ」、「パシェドゥ」のトゥーム・チャペルの存在が明らかとなり、周囲にも同時代のシャフト墓、土壙墓が広く分布していることが判明した。2004 年からは遺跡の西側に位置する「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺に発掘の重点が置かれ、2005 年には中王国時代の人物「セヌウ」の墓が埋葬時の状態で見つかった。以降、当該地区からは同時代の埋葬が多数発見され、この遺跡が中王国・新王国の両時代で活発に利用された墓地であることが分かってきた。2015 年には「イパイ」と「タ」の間の地区で発掘調査が実施され、中王国時代の墓とともに、日乾レンガによる壁体を持ち、「パシェドゥ」墓と類似する地下室を持つ新王国時代の墓 (シャフト 125) が発見された<sup>1)</sup>。

\* 1 東日本国際大学学長・教授

\* 2 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授学長

\* 3 早稲田大学文学学術院教授

\* 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

\* 5 日本学術振興会特別研究員 (DC)

\* 6 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

\* 1 *President, Professor, Higashinippon International University*

\* 2 *Visiting Associate Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*

\* 3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

\* 4 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*

\* 5 *Reserch Fellow (DC), Japan Society for the Promotion of Science*

\* 6 *MA Student, Department of Archaeology, Waseda University*

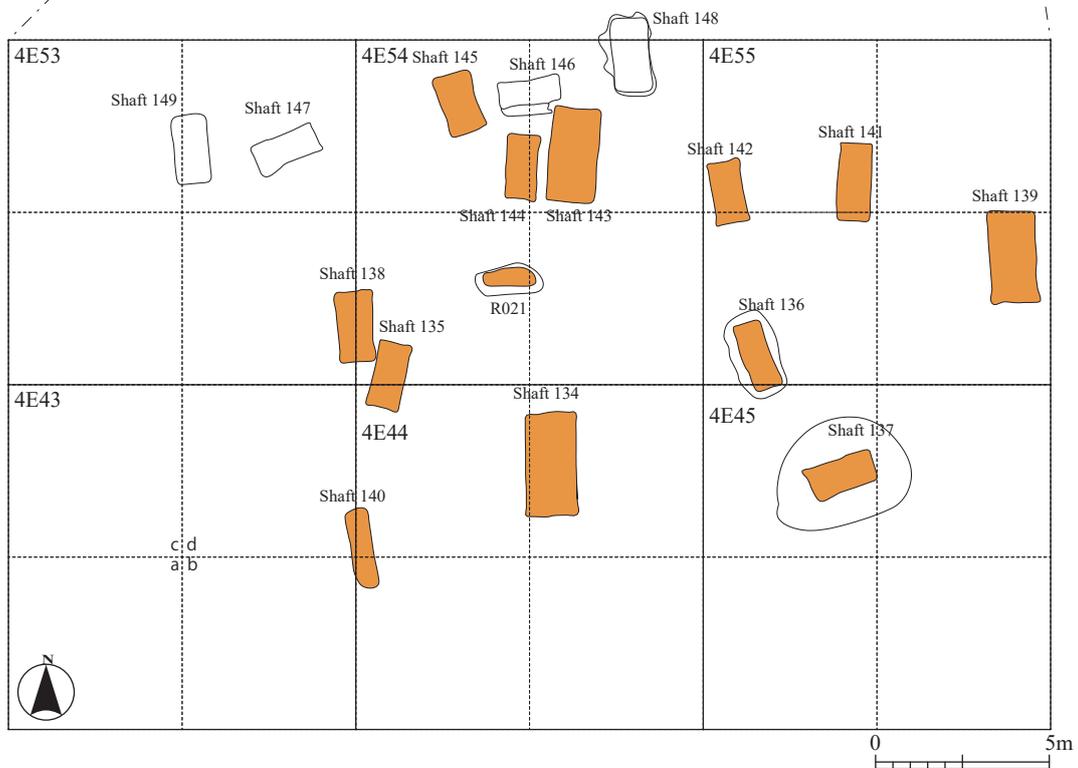
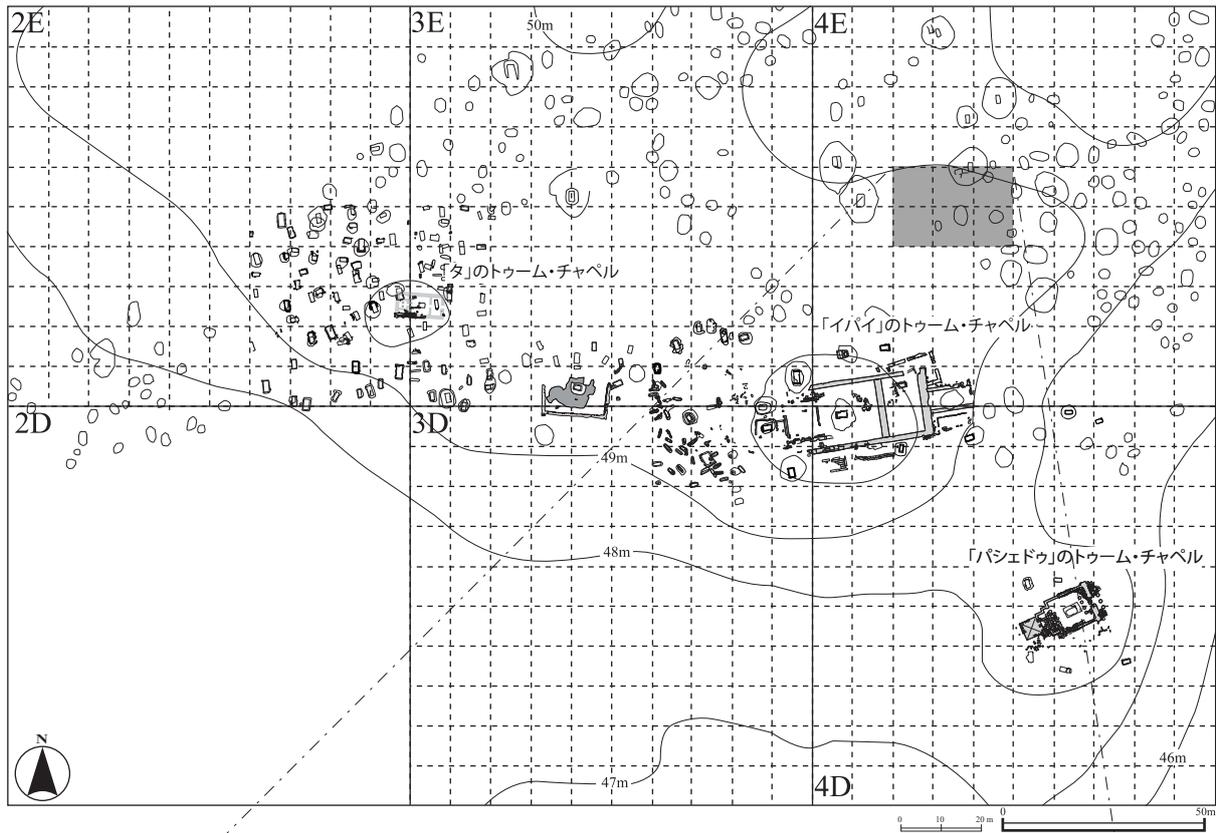


図1 北ダハシュール北遺跡の地図と第24次発掘区  
 Fig.1 Map of Dahshur North and the excavated area in 24th season.

これまでは「イパイ」、「パシェドゥ」、「タ」墓やシャフト 125 など、本遺跡の地形でも比較的高所にあり、地上の構造物の存在が推測される地点を中心に発掘調査を実施しており、それぞれの地点で特徴的な遺構・遺物が発見されてきた。こうした経緯を踏まえ、今期調査では遺跡全体像のより広範な把握を目的として、「イパイ」墓の北東に新たな調査区を設定し、発掘調査を実施した<sup>2)</sup>。以下にその成果について報告する。

## 2. 地上部の発掘調査

イパイ墓の北東、南北 15m、東西 25m の範囲で地上部の発掘が実施された。対応するグリッドは 4E54、55、43d、44c-d、45c-d、53b である（図 1）。薄い表層を除去したところ、16 基のシャフト開口部（シャフト 134～149）と浅い土壌墓（R021、図 2）が発見された。土壌墓はグリッド 4E54a に位置しており、東西約 2 m、南北約 0.8m、深さは約 15cm で植物のマットの一部と骨片が出土した。残存状態が悪く、副葬品等は確認されなかった。グリッド 4E54c からブロンズ製と思われる硬貨が出土した（図 3）。表面には人物の肖像を表現したと見られる隆起があったが、磨耗のため詳細は不鮮明であった。

その他、土器片が多数出土しており、特徴的な器形を図 4 に示した。図 4 の 5、6 は 4E44d から出土した Nile C<sup>3)</sup> の高台付の鉢形土器の一部であり、図 4.5 の内面には焼成痕が認められた。焚香に利用された土器と考えられており、中王国時代に年代付けられる（Schiestl and Seiler 2012: 354-355, I.H.3.a）。図 4.8 は 4E43d から発見された中王国時代の半球形の碗（Nile B2）であり、図 4.17-19 も中王国時代の遺跡で数多く見られる大型丸底壺形土器（ビール壺、Schiestl and Seiler 2012: 640-643）の口縁部と考えられる。図 4.12 は 4E54b から出土した Marl C2 の大型・広口の壺の口縁部断片であり、中王国時代のメンフィス・ファイユーム地域やデルタ地域でよく見られる器形である（Schiestl and Seiler 2012: 580-583, 596-599）。一方図 4.9、10 はそれぞれ 4E43d、45c で出土した Nile B2 の壺形土器の口縁部であり、新王国時代における「ビール壺」（Aston 2011: 217-220）に属するものと考えられる。図 4.15 は 4E54b から出土した Marl D のアンフォラの口縁部断片であり、新王国時代に年代付けられるものである。以上のように、表層から出土した土器群は中王国時代と新王国時代のものが大半を占めている<sup>4)</sup>。

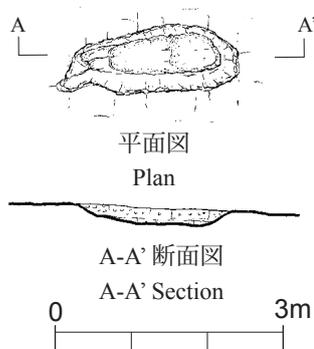


図 2 R021 平面・断面図  
Fig.2 Plan and section of surface burial R021.

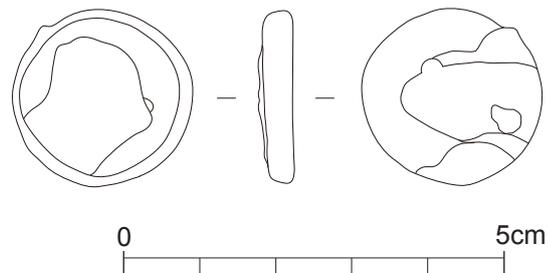


図 3 グリッド 4E54c 出土ブロンズ製コイン  
Fig.3 Plan and section of surface burial R021.

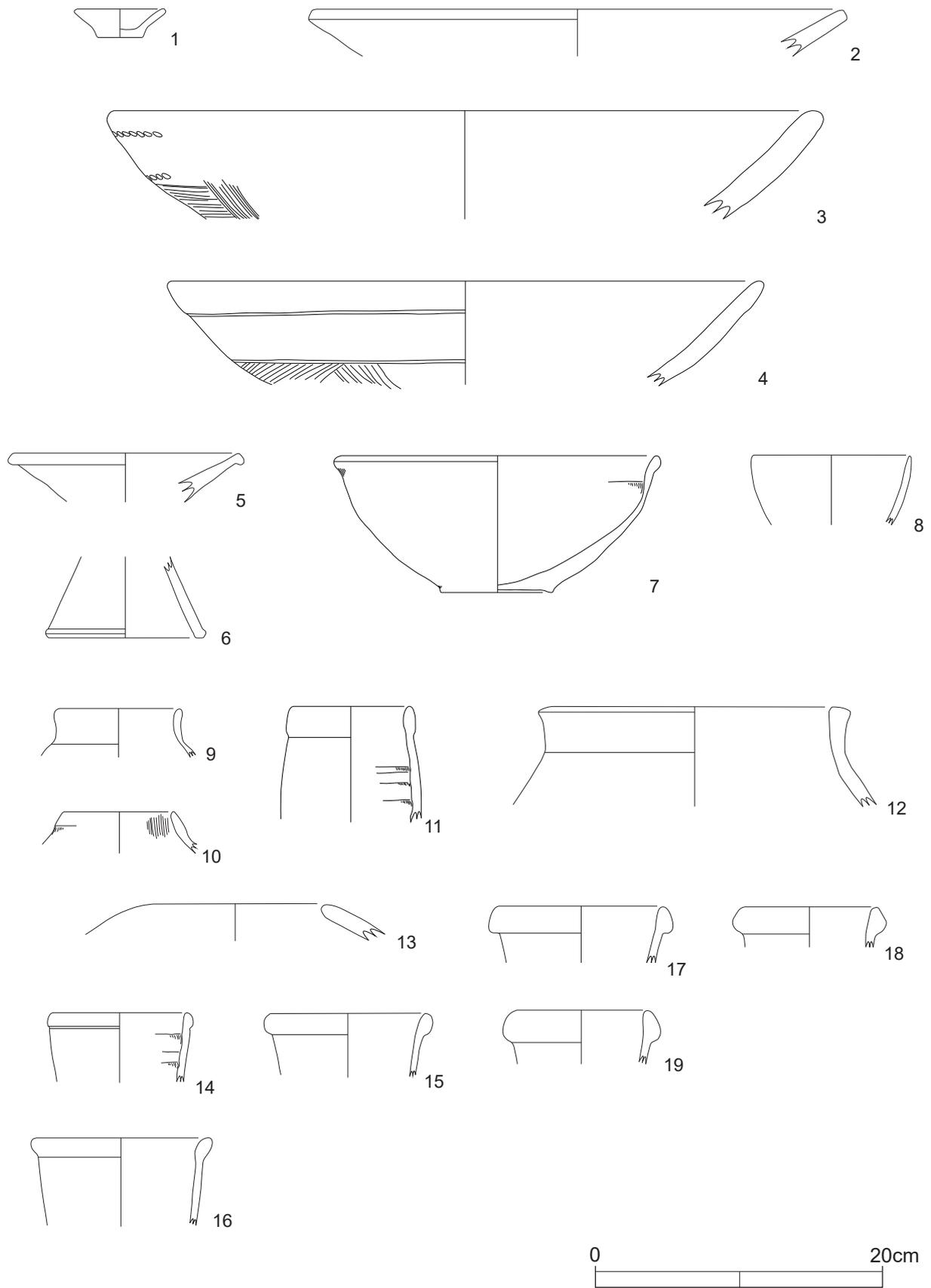


図4 発掘区表層出土土器片  
Fig.4 Pot shards from surface layers

### 3. シャフト墓の発掘調査

#### (1) シャフト 134

##### ①遺構の概要 (図5)

シャフト 134 はグリッド 4E44d に位置しており、付近は地山の礫層が比較的深く、1m 前後の厚さがある。岩盤層で計った開口部平面の大きさは南北 3.0 m、東西 1.5m であり、長軸の方向はほぼ南北に等しい。岩盤開口部の周囲は日乾レンガによって囲われており、南面以外はレンガ列が残存していた。シャフトの開口部平面の規模はこの遺跡の中でも大きい部類に入るが、岩盤からわずか 2.2 m で床に達しており、埋葬室を持たなかった。

シャフト内堆積の上部は砂層で、深さ約 2m から崩れた日乾レンガが集中して出土した。その下には地山由来と思われる礫を多く含む層が堆積しており、ここから新王国時代の土器片とともに人骨が出土した。この層から後述する楕円形のファイアンス製品 (図 6.1) が出土した。シャフト底部北側、ほぼ床面上から日乾レンガが集中して出土しており、人骨、楕円形のファイアンス製品、土器片、プラスター片が混在していた。北東部床面直上からは大型の丸底皿形土器 (図 7.1) が出土した。皿は床に置かれていたものが土圧で割れたような出土状況であり、完形に復元された。ファイアンス製品は第 12 王朝後期から第 13 王朝初期に類例が認められ、共伴していた中王国時代の土器も概ね合致する年代を示していた。

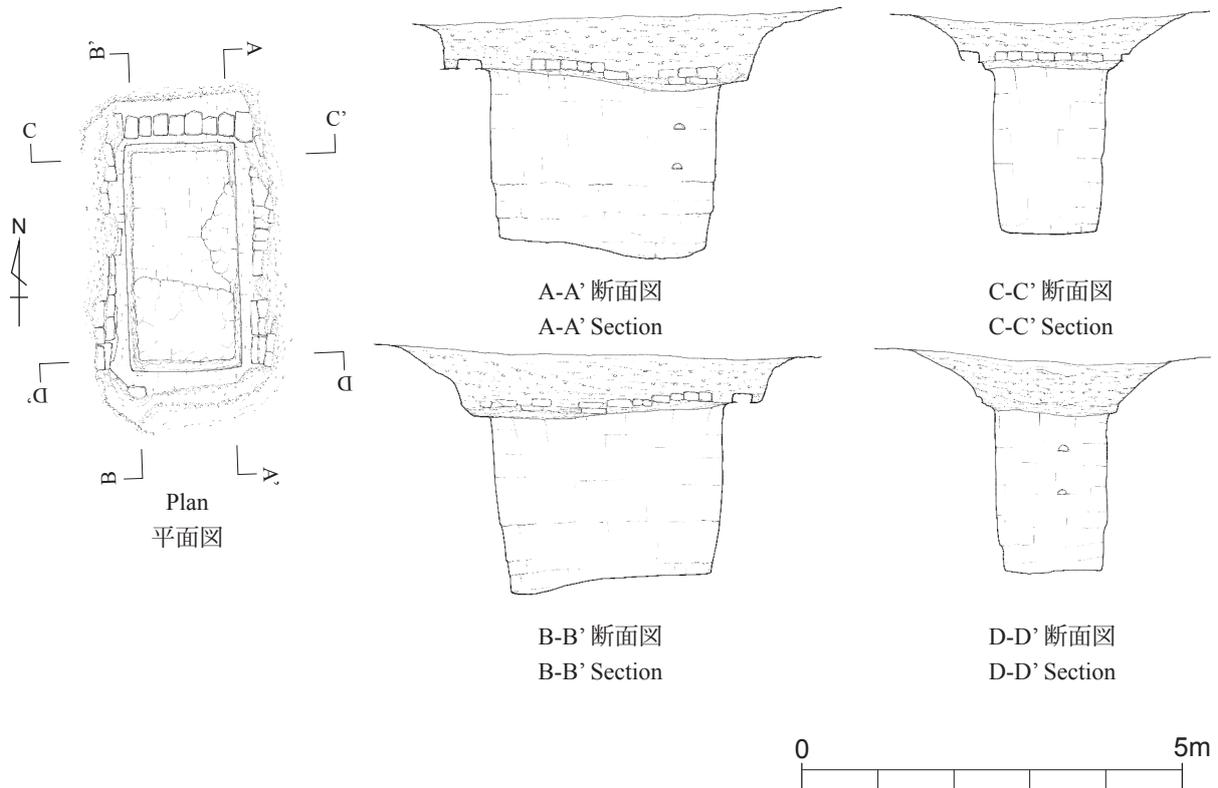


図5 シャフト 134 平面・断面図

Fig.5 Plan and sections of Shaft 134

## ②出土遺物

## a) ファイアンス製品 (図6)

図6.1に代表されるファイアンス製品は全部で96点出土しており、半球状で主に黒色であり、球面部には縞状の溝があり、平坦面にモルタルが付着しているものがあった。これは人型木棺頭部の装飾として使用されたものと考えられ、同様の装飾はダハシュール北遺跡で発見されたセベクハトの人型木棺(吉村他2010: 18, 写真7; Baba and Yoshimura 2010: 11; Baba and Yazawa 2015: 8-9, Pl.XIII; Yoshimura et al. 2018)、メイル遺跡のハピアンクティフィの人型木棺にも同様の装飾が認められ(Hayes 1953: 312, Fig.203)、前者は第12王朝後期から第13王朝初期、後者は第12王朝末に年代づけられている(Rigault 2015: 330)。ただし、これらの類例では平面が真円に近いのに対し、シャフト134の例は楕円形を呈するという違いがある。

図6.2、6.3は円筒形のビーズでそれぞれ白色、緑色、図6.4は輪形のビーズで青色である。

## b) 土器 (図7)

図7.1-3は日乾レンガの集中から出土しており、それ以外はレンガ集中より上の砂層から出土した。図7.1は前述の大型丸底皿で、胎土はNile Cである。図7.2はNile B2の半球形碗の断片で口縁頂部に赤色スリッパが塗布されており、中王国時代の遺跡で数多く見られる器形である。図7.3はNile Cの高台付の鉢形土器で、内面には焚香に利用された痕跡と考えられる黒変が観察された。同種の器形はアメンエムハト3世治世後期から見られ、第13王朝中期まで認められる(Schiestl and Seiler 2012: 360-362)。図7.4は中王国時代に数多く見られる大型広口壺の断片で、胎土はMarl C compactに分類される。おそらく胴部は袋状、平底の器形と推測され、センウセレット3世治世後期から第13王朝前半に年代づけられる<sup>5)</sup>。図7.5はNile B2の丸底壺の底部断片であり、内面底部に小礫を含む白色プラスタが付着していた。図7.6は長頸で把手を持ち、外面が黒色で軽いミガキが施された土器で、キプロスのBase Ring I Wareに該当する器形と考えられる(Merrillees 1968)。表面の磨耗が顕著で、この埋葬に使用された副葬品ではなく、盗掘後に混入したものと推測される。

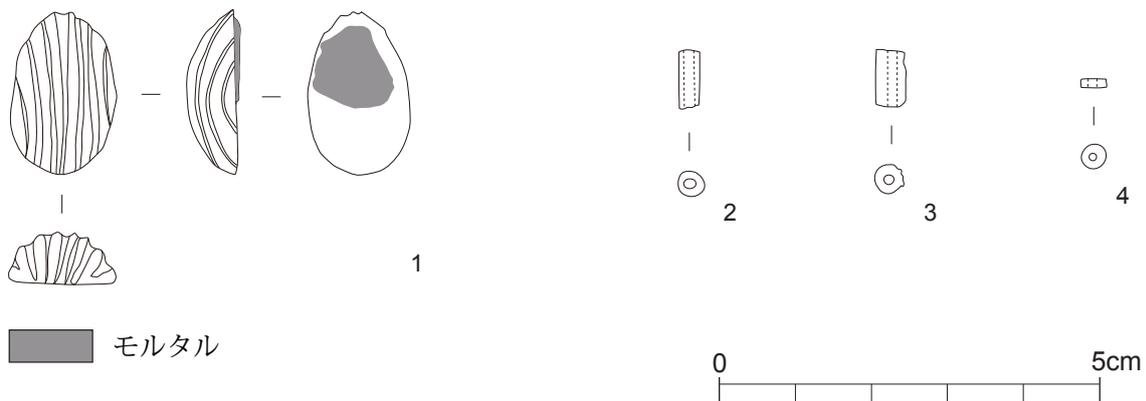


図6 シャフト134出土ファイアンス製品

Fig.6 Faience objects from Shaft 134

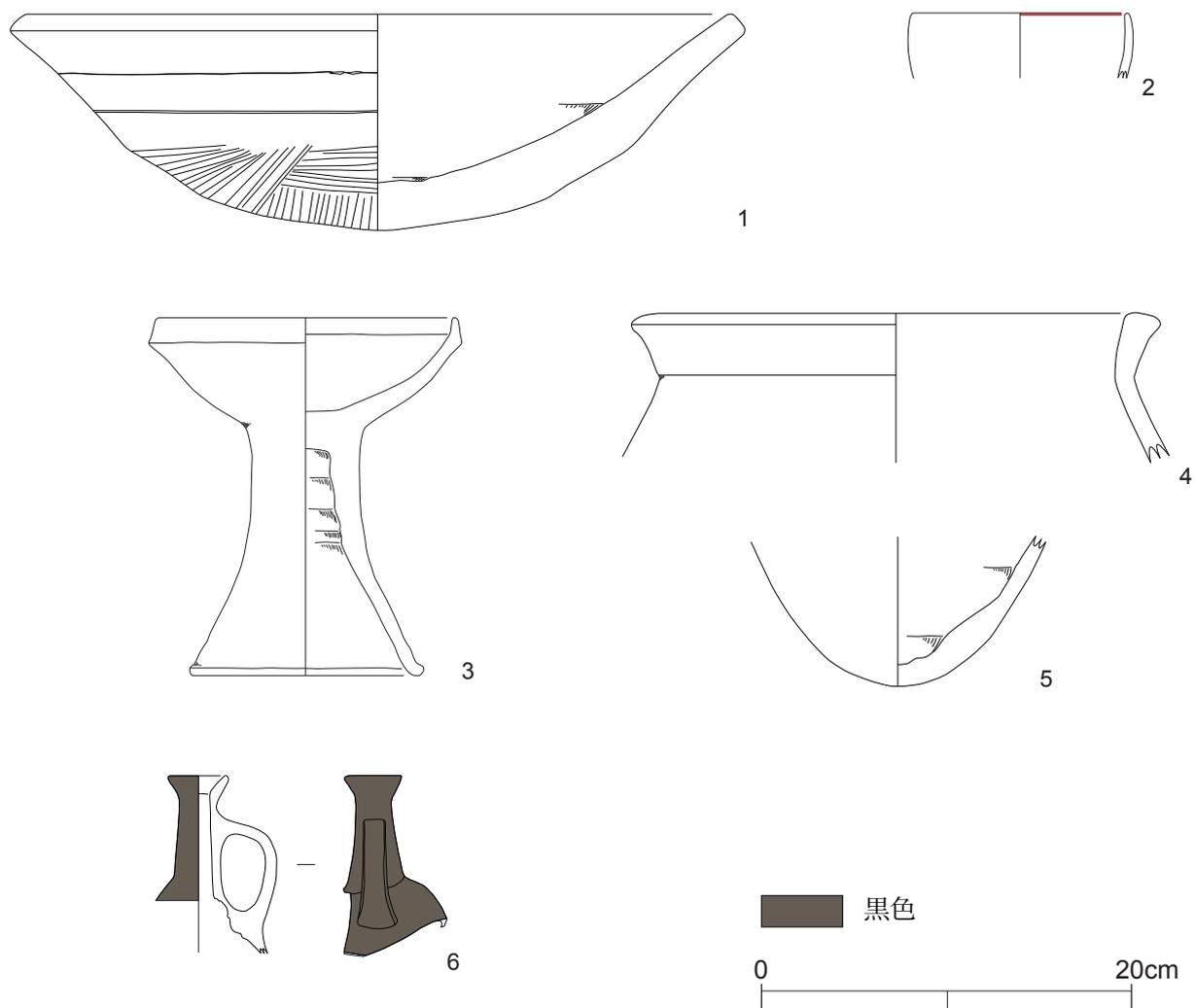


図7 シャフト134出土土器片  
Fig.7 Pottery vessels from Shaft 134

## (2) シャフト135 (図8)

シャフト135はグリッド4E54aに位置し、開口部平面の大きさは南北1.9m、東西1.0mで、長軸の方向は南北に近い。シャフトの深さは1.2mで、埋葬室はない。土器片(図9)が出土しているものの、それ以外に埋葬の痕跡は認められないため、墓として使用されなかったと推測される。

## (3) シャフト136

### ①遺構の概要(図10)

シャフト136はグリッド4E55aに位置し、付近は地山の礫層が比較的厚く、1m前後の厚さがある。開口部平面の大きさは南北2.2m、東西0.9mで、長軸の方向はほぼ北北西―南南東である。シャフト部の深さは3.8mで、底から南側に地下室が設けられている(A室)。A室は奥行き1.1m、幅1.1m、天井高0.7mで比較的小さい。

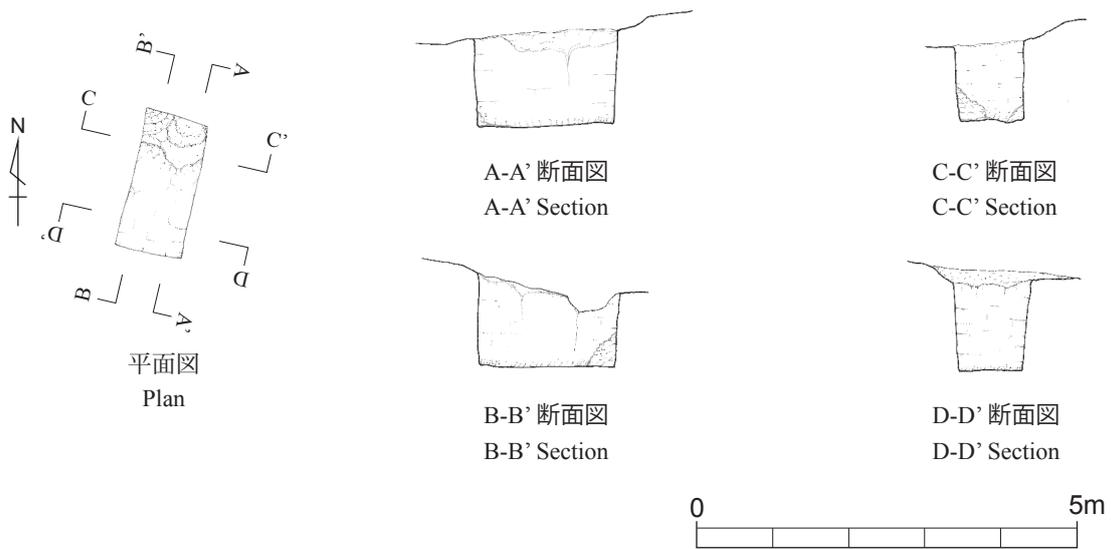


図8 シャフト 135 平面・断面図  
Fig.8 Plan and sections of Shaft 135

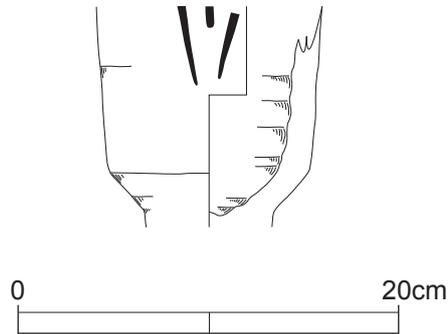


図9 シャフト 135 出土土器片  
Fig.9 Pottery vessel from Shaft 135

地表面から深さ 1m までは礫が混じった砂層が堆積していたが、それより下のシャフト部、A 室には風成の細砂が堆積していた。盗掘を受けており、内部からは土器片、木棺片、ファイアンス製ビーズ、貝製の耳飾り、布製品などが出土した。耳飾り（図 11.2）の類例は新王国時代に年代づけられるが、シャフトのほぼ最下部、A 室入口前から出土した大型壺形土器の断片（図 12.5）は中王国時代と考えられる。したがってシャフト 136 は、明確ではないものの、中王国時代のシャフト墓として当初作られ、新王国時代に再利用された可能性がある。

## ②出土遺物

### a) 装身具（図 11）

図 11.1 はシャフト上部で発見された青色ファイアンス製の球形ビーズである。図 11.2 は貝製で玦状の耳

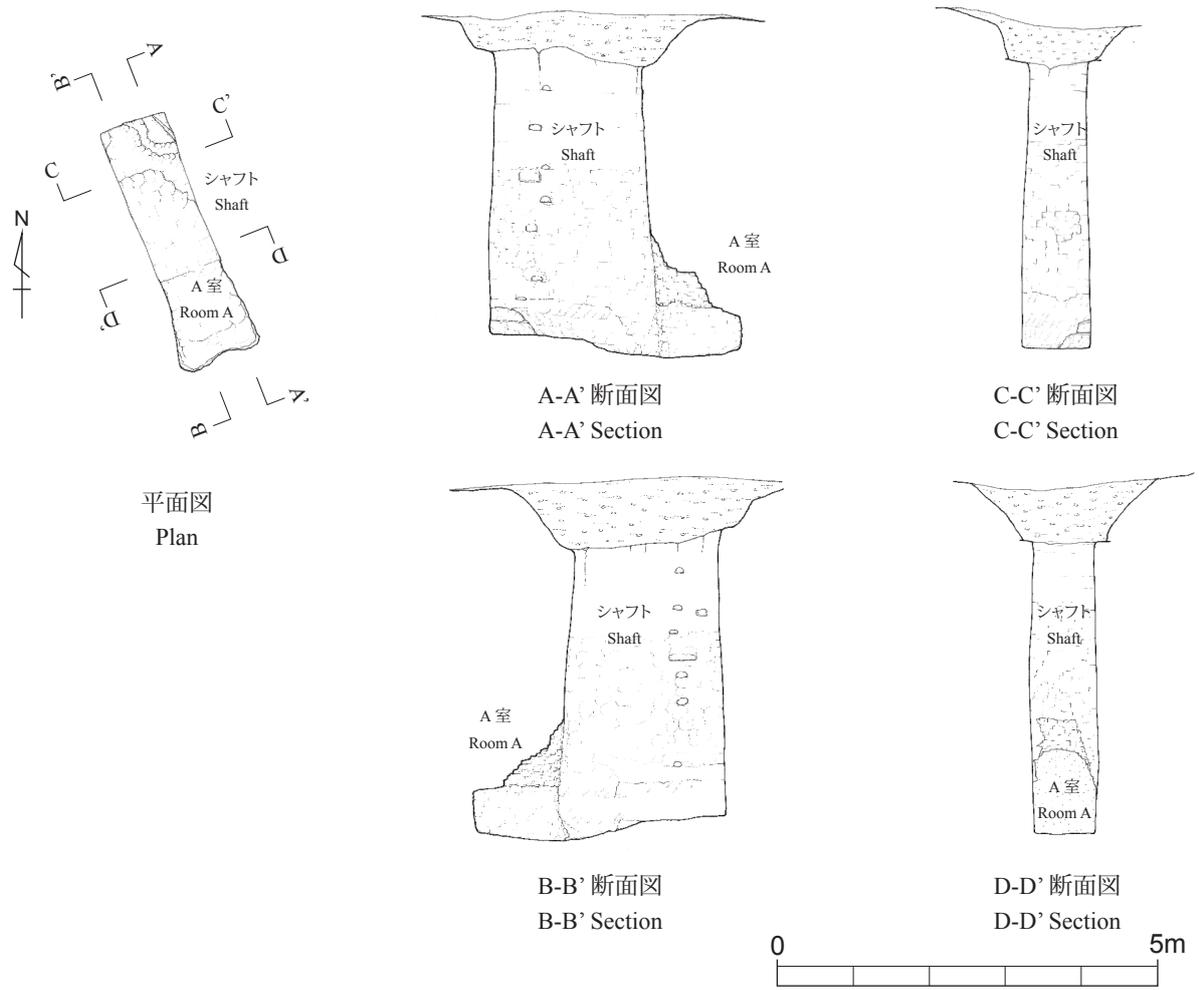


図10 シャフト136平面・断面図  
Fig.10 Plan and sections of Shaft 136

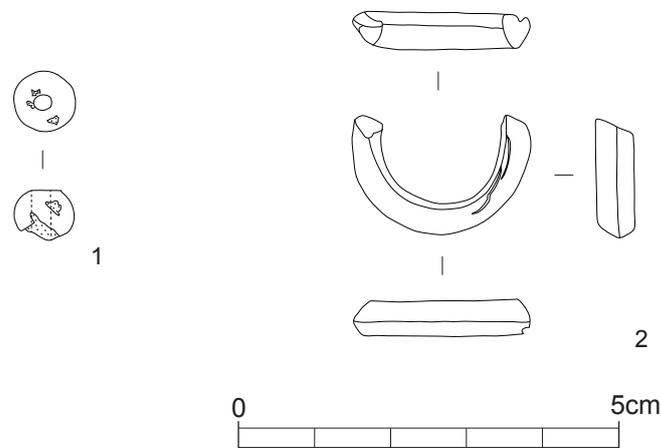


図11 シャフト136出土装身具  
Fig.11 Ornaments from Shaft 136

飾りの断片と考えられ、スリットに耳朶を入れて装着するタイプである。これまでダハシュール北遺跡ではイバイ墓から同様の耳飾りが出土している他、サッカラやグラブの墓でも発見されており、新王国時代に年代づけられている (Raven 2001: Pl.26, cat.354; 2005: 92, Pl.97, cat.218)。

#### b) 土器 (図 12)

図 12.1 ~ 12.3 はシャフト上部の砂礫層から出土しており、図 12.1 と 12.3 の胎土は Nile C、図 12.2 は Nile B2 である。図 12.4、12.5 はシャフト最下部及び A 室から発見された土器片が接合されたもので、両者とも Nile C であり、後者は中王国時代に数多く見られる大型丸底壺 (ビール壺) の胴部と考えられる。

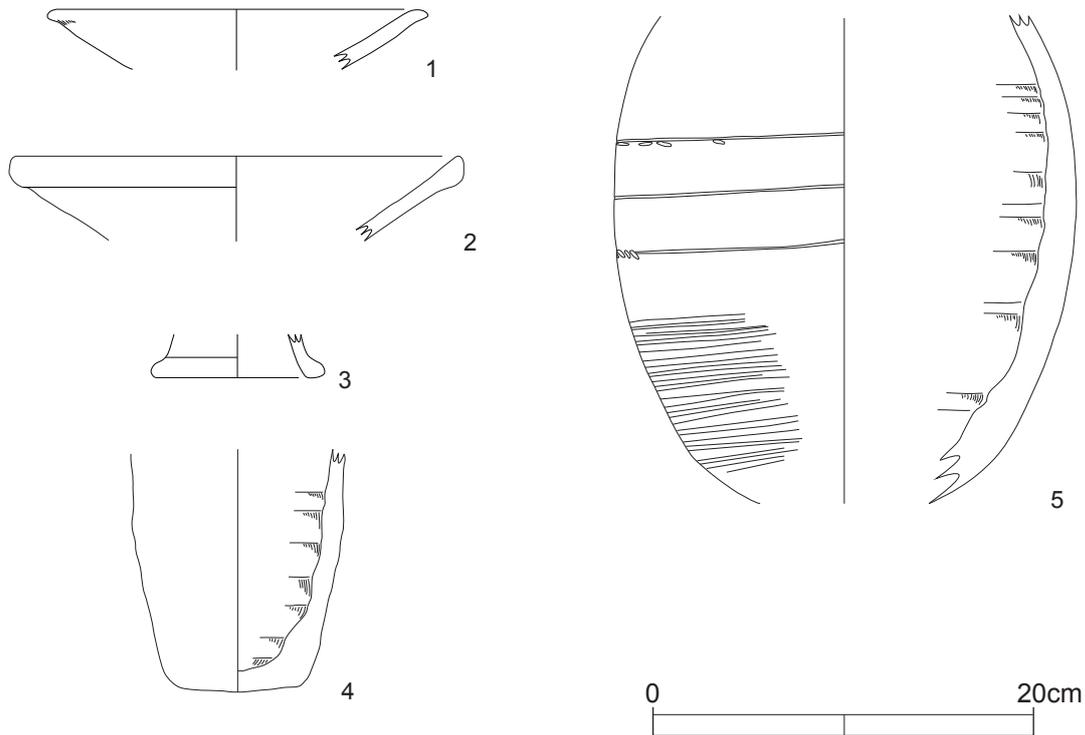


図 12 シャフト 136 出土土器片  
Fig.12 Pottery vessel from Shaft 136

#### (4) シャフト 137

##### ①遺構の概要 (図 13)

シャフト 137 はグリッド 4E45c に位置しており、岩盤部分から計測した開口部は南北 1.1m、東西 2.1m で、長軸の方向は東北東-西南西に近い。シャフト部上部は厚さ約 1m の礫を多く含む地山層であり、すり鉢状に開口している。シャフト部の深さは 8.6m、底部から東側と西側に部屋が設けられていた (それぞれ A 室、B 室)。A 室は南北が 6.0m、東西が 4.7m の矩形で四隅がやや突出した平面形を呈する。天井高は最高部で 1.5m、床は南側が一段高くなっていた。A 室の入口はシャフトの幅よりも若干狭くなっており、床には日乾レンガが並べられていた。B 室は奥行き 1.2m、幅 0.9m、天井高 1.0m で遺物も見られず、掘削途中で放棄されたと考えられる。

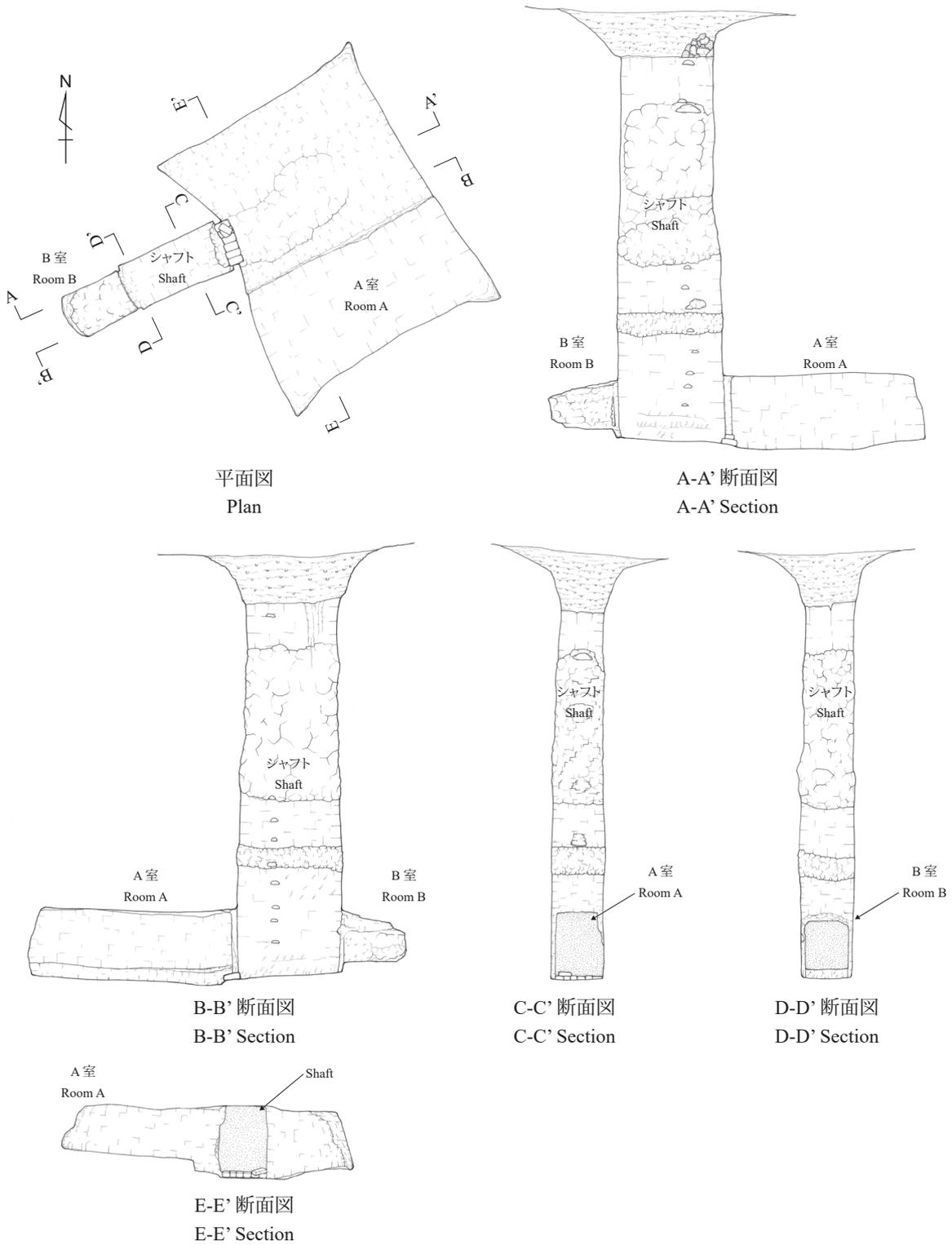


図13 シャフト137平面・断面図  
Fig.13 Plan and sections of Shaft 137

シャフト部は風成の細砂が底部まで堆積しており、A室、B室内にも厚く細砂が堆積していた。シャフト部からは土器や人骨、ミイラの断片、レリーフ片などに加え、石灰岩製のステラの断片、石灰岩製供物卓などが出土した。A室内部からは大量の人骨、土器、石灰岩製ステラ片、木棺片、ガラス製の象嵌の断片、陶棺片、スカラベ型印章、ビーズ、石製容器片、ファイアンス製指輪などが出土した。土器は第18王朝後期と第19王朝以降に年代づけられるものが混在していることや、多数の人骨が出土していることから、この墓は一定の期間に渡って繰り返し埋葬が行われたと推測される。

## ②出土遺物

### a) 石灰岩製ステラ (図14)

図14.1はA室入口付近で発見された石灰岩製ステラの断片で、高さ72cm、幅36cm、厚さ21cm、表面には12行のヒエログリフが刻まれている。内容は太陽神への祈祷であり、死者の書第15章として知られている碑文の一部であると考えられる。同様の碑文はサッカラのポスト・アマルナ期のステラ、ピラミディオン、墓のレリーフなどに類例が認められる (Raven 2010: 255)。被葬者の名前や称号が言及されている部分は残存していなかった。図14.2は特徴からこのステラと同一個体と考えられる。こうしたステラはトゥーム・チャペル内に立てられていたと推測されるが (e.g. Martin 1989: 29-31 and Pls. 21-22, scene 7)、シャフト137の地上部には建造物の痕跡は認められなかった。したがって、このステラは別の墓から再利用の目的で持ち込まれたものと推測される。図14.3は石灰岩製ステラの下部断片で、シャフト部下部で出土した。沈め浮き彫りで表現された供物を挟んで、向かって右側には4列のヒエログリフの碑文が並び、左側には人物の足元が刻まれていた。

### b) 石灰岩製供物卓 (図15)

直方体で上面が窪んでおり、窪みの中央部にヘテプの図像が一段高く彫り出されている。この供物卓はシャフト部のA室・B室の開口部とほぼ同じレベルから出土した。本来どのように使用されていたのか、再利用のために持ち込まれたのか等は不明である。

### c) オストラコン (図16)

A室から発見されたもので、土器の外面に日輪を戴くハヤブサの図像が黒色で描かれており、その前には黒色で碑文が書かれている。土器は轆轤を使用せず手捏ねで作られていたもので、本来の器形や部位は不明である。

### d) 陶棺片 (図17)

頭部と、交差した手を表現した陶棺の断片である。全体は黄色で覆われ、顔や手の部分は赤褐色で表現されていた。陶棺で交差した手の表現を持つものは新王国時代に見られ (Cotelle-Michel 2004: 45)、サッカラの新王国時代の墓地で発見されたものは第19から第20王朝に年代づけられている (Schneider 1996: 20, Pl.10, 13; Raven 2001: 37-38, Pl.19; 2005: 77, Pl.94, 101)。

### e) スカラベ型印章 (図18.1)

おそらく施釉凍石製で、A室北西部から出土した。背面は簡略化されており、頭部から臀部へ貫通した穿孔がある。腹面には中心にスカラベ、その両脇にウラエウスが印刻されている。その上下には、ジェド柱の

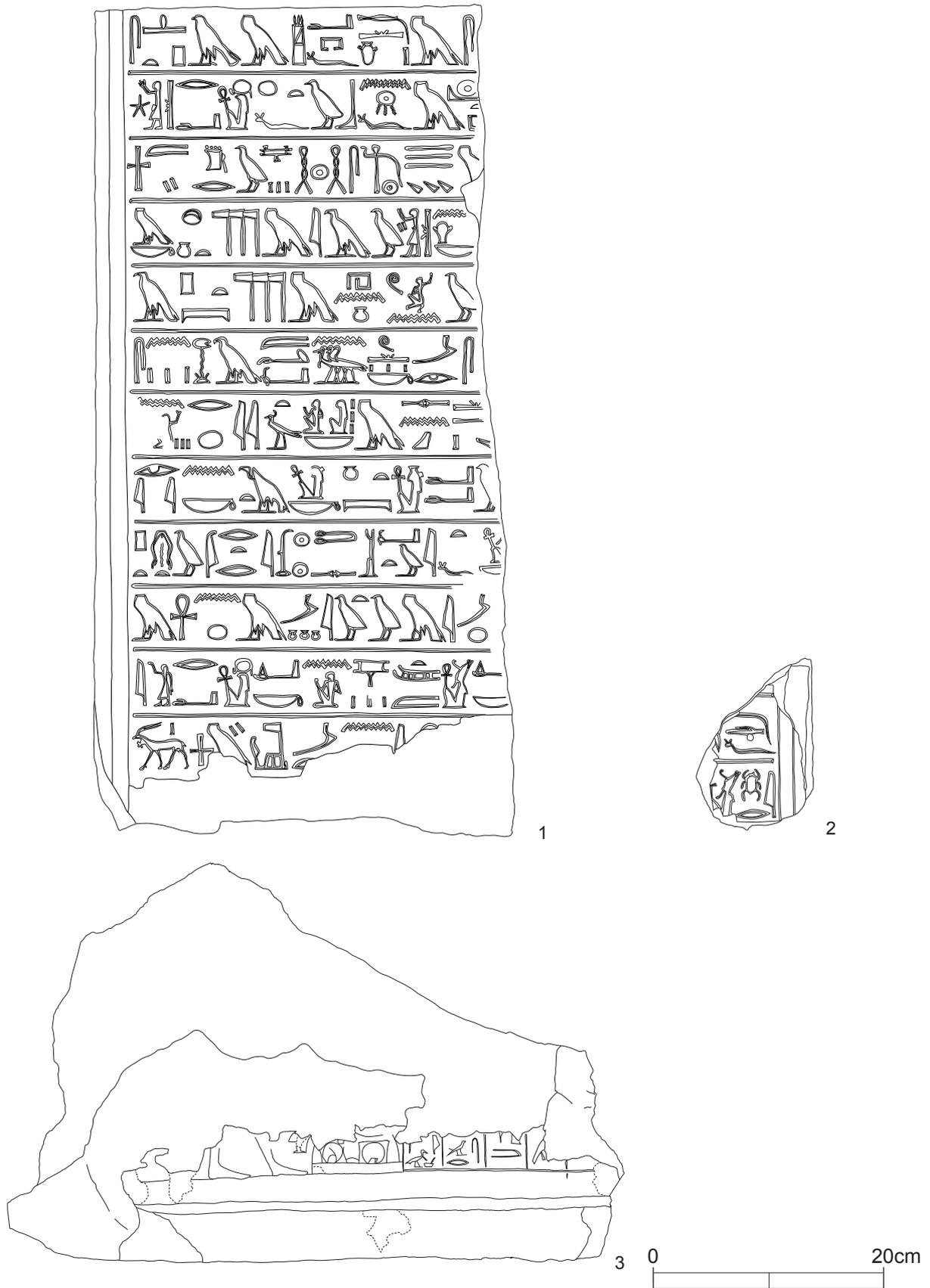


図14 シャフト137出土石灰岩製ステラ片  
Fig.14 Limestone stela fragments from Shaft 137

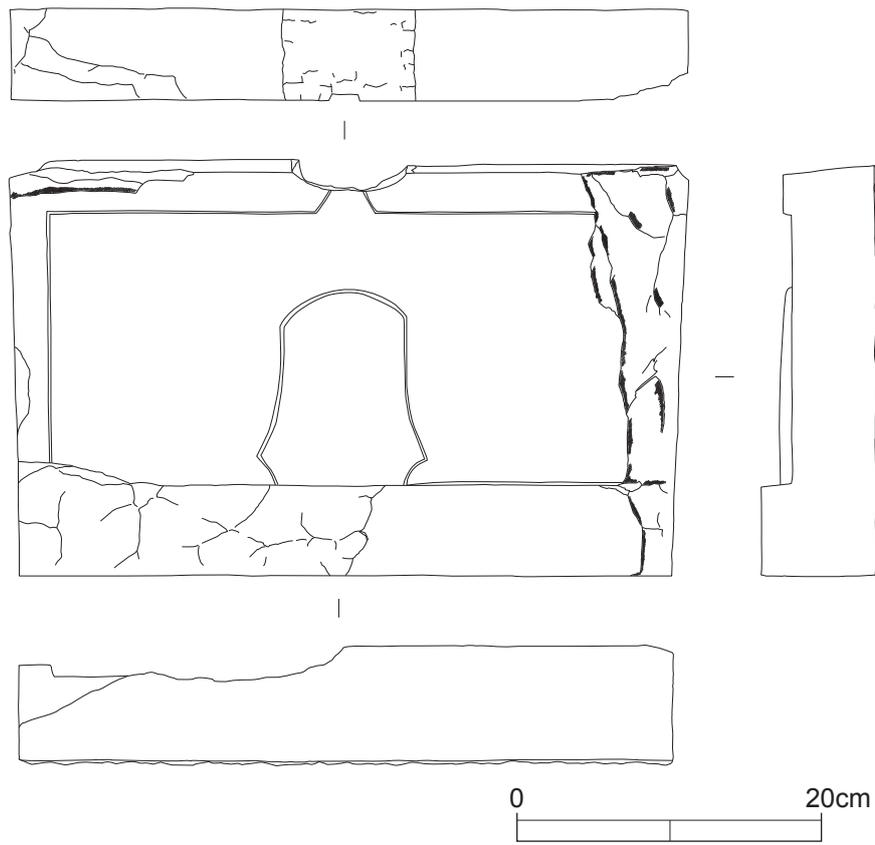


図15 シャフト137出土石灰岩製供物卓  
Fig.15 Limestone offering table from Shaft 137

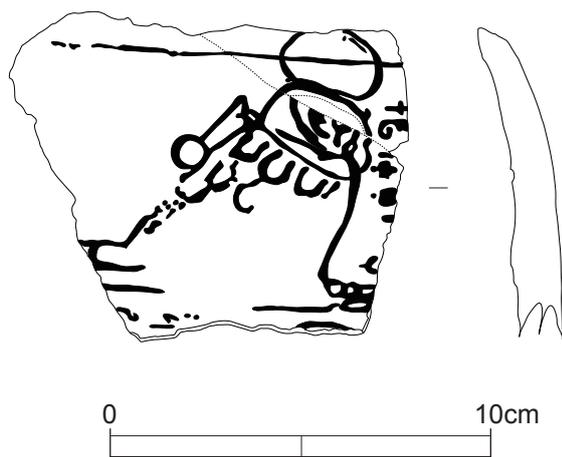


図16 シャフト137出土  
Fig.16 Ostracon from Shaft 137



図17 シャフト137出土陶棺片  
Fig.17 Fragments of pottery coffin from Shaft 137

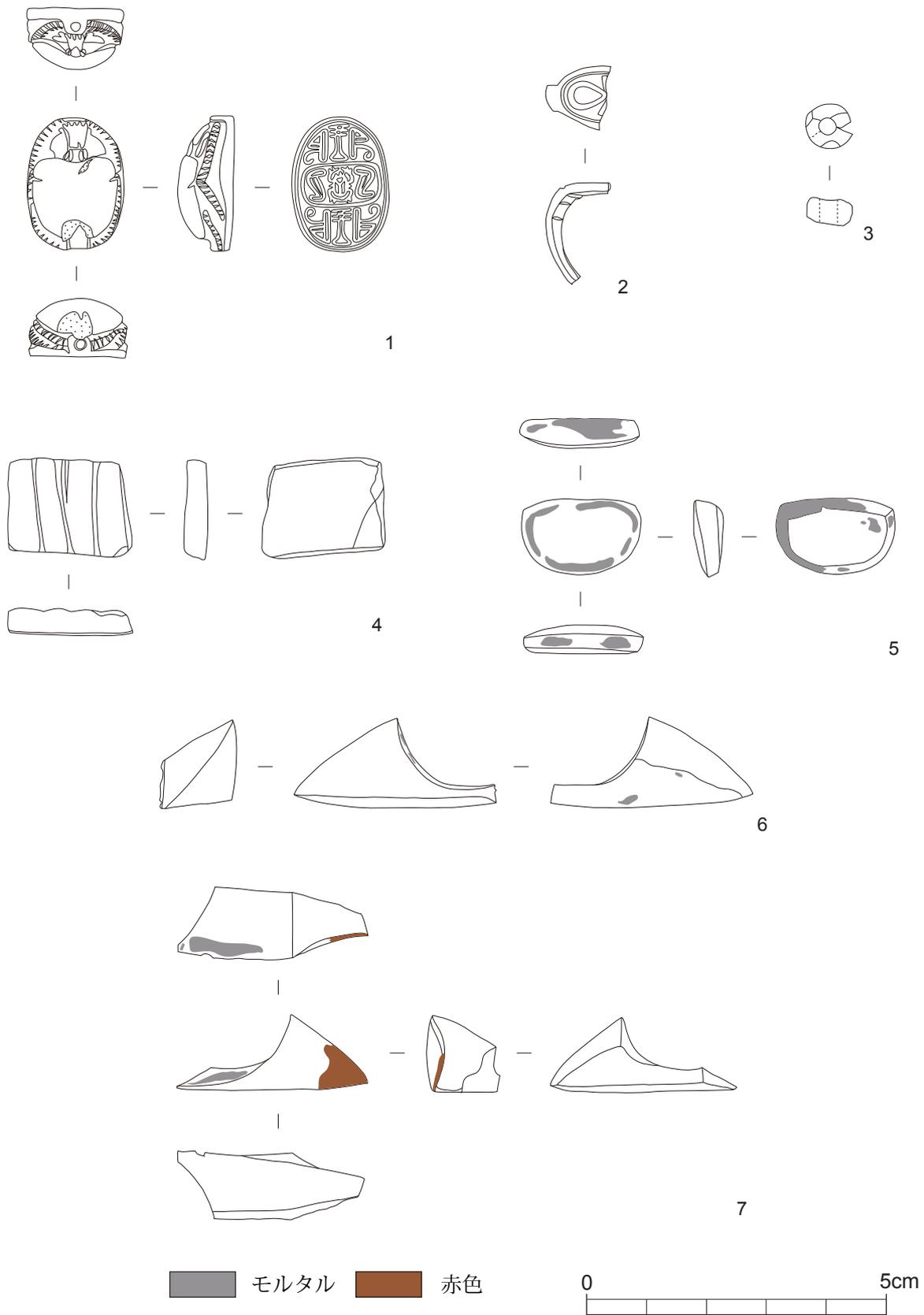


図18 シャフト137出土小型遺物  
Fig.18 Small finds from Shaft 137

両脇に赤冠が表現されていた。スカラベの両脇にウラエウスというモチーフは、アメン神を暗示しているとされる (Raven 2001: 30)。

f) ファイアンス製指輪片 (図 18.2)

青色のファイアンス製で、ベゼル部分は欠損しているがヒエログリフの「アネク」が沈み彫りで表現されていたと考えられる。同様のベゼルを持つファイアンス製の指輪はマルカタやアマルナなどでも発見されている (Giddy 1999: 105, Pl.23.1314)。

g) ガラス製ビーズ (図 18.3)

青色ガラス製のビーズで A 室から出土した。A 室からは他にも同様のビーズ片が少なくとも 3 片確認されている。

h) 象嵌片 (図 18.4-7)

図 18.4 は A 室から出土した青色ガラス製の象嵌の断片であり、表面には畝状になっており、裏面は平坦である。サッカラのホルエムヘブ墓からも類似した象嵌片が出土しており、第 18 王朝～第 19 王朝の人型木棺の鬘部分、あるいは襟飾りの表現に用いられた可能性が指摘されている (Schneider 1996: 23)。図 18.5-7 は人型木棺の眼の表現として使用されていた象嵌である。図 18.5 は青白色のガラス製で眼の虹彩に当たる部分である。図 18.6、18.7 は白目の部分にあたり、後者には目尻の充血が赤色で表現されていた。接着のためのモルタルが各所に残存している。こうした眼の象嵌はダハシュール北遺跡でこれまでに発見された新王国時代の墓からも数多く発見されている。

i) 石製容器 (図 19.1、19.2)

図 19.1 は A 室から発見されたトラバーチン製の容器の断片であり、円盤状の口縁部が特徴的である。図 19.2 はシャフト部から出土したトラバーチン製容器で、袋状の胴部を持ち、平底である。これら 2 つは同じタイプの器形と推測され、第 18 王朝から第 19 王朝に年代付けられている (Aston 1994: 154, No.185)。

j) 土器 (図 19.3-17、図 20、21)

掲載したシャフト 137 出土土器の多くは A 室から出土した断片によって構成されている。図 20.1、20.2 は漏斗状の頸部を持つ丸底の土器であり、図 20.3-9 も全て同タイプの土器と考えられ、胎土は Nile B2 である。第 18 王朝後期以降数多く見られるようになる器形であり、サッカラのウナス王ピラミッド参道南の新王国時代の墓域で出土した同タイプの土器を元に、B. アストンが行なった分類を参照すると、図 20.1、20.2 はツタンカーメンからホルエムヘブ治世の例と特に類似している (Aston 2012: Fig.VII.4)。図 21.1、21.2 は主に胎土 Marl D のアンフォラであり、前者は肩部直下にはヒエラティック・ドケットが記されていた。D. アストンの分類に基づけば、これらは Type B1 に相当すると考えられ、アメンヘテプ 3 世治世からラムセス 2 世治世にかけての例が類似している (Aston 2004: 187-191, Fig.7)。図 21.3 は胎土 Marl F のアンフォラの底部であり、D. アストンの分類では Type C1 に該当し、第 19 王朝以降に年代づけられる (Aston 2004: 196)。図 21.4 は底部の特徴的な形状 (stump base, Hope 1989: 94) からカナーン壺と推測され、D. アストンによる分類では Type A2 に該当し、アメンヘテプ 3 世治世の例が最も類似した形状を持つ (Aston 2004: 179, Fig.2.a)。ただし、割れ口は磨耗しており、表面にタフラが付着していたため、この断片はシャフト内

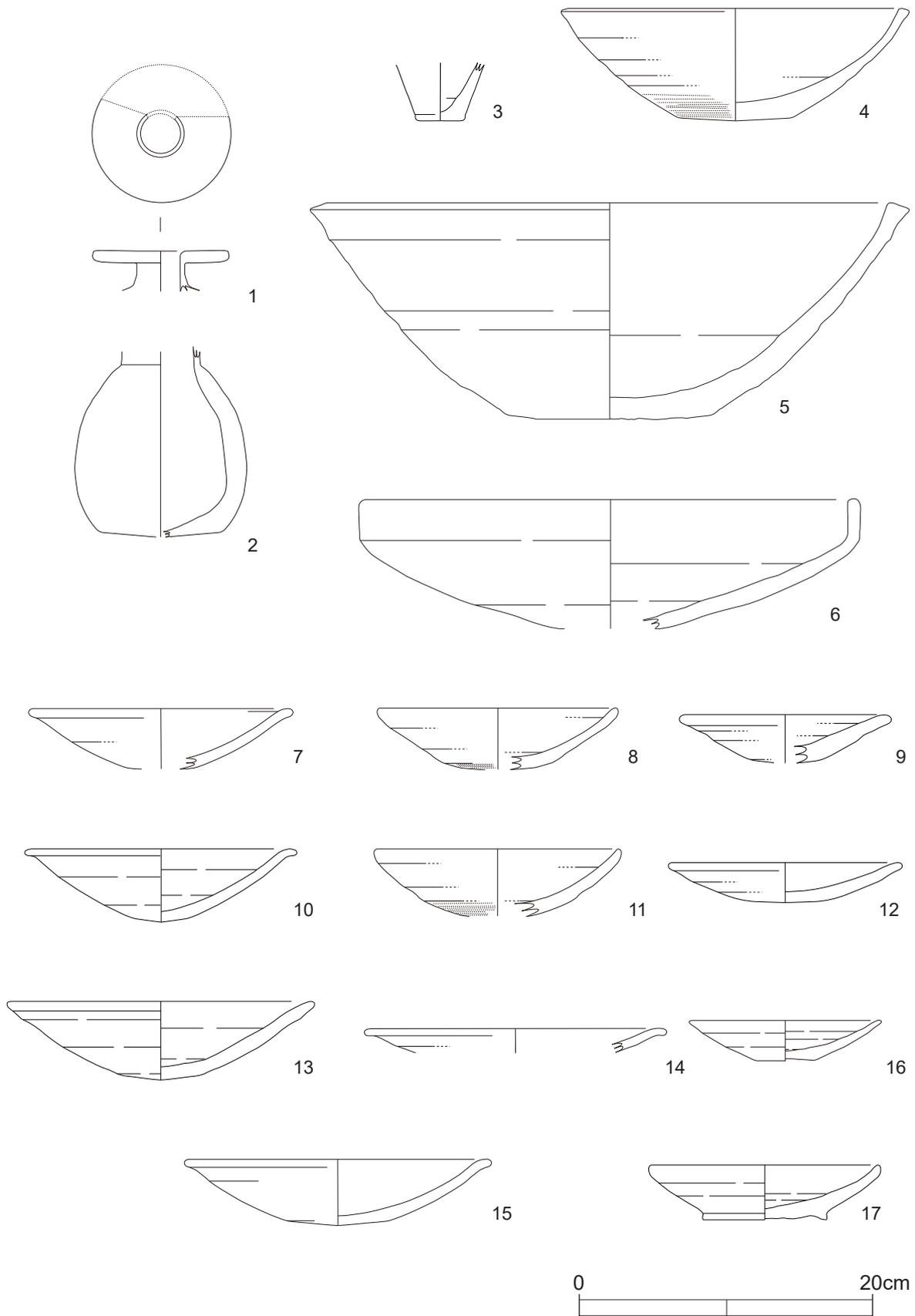


図19 シャフト137出土石製容器・土器片  
Fig.19 Stone and pottery vessels from Shaft 137

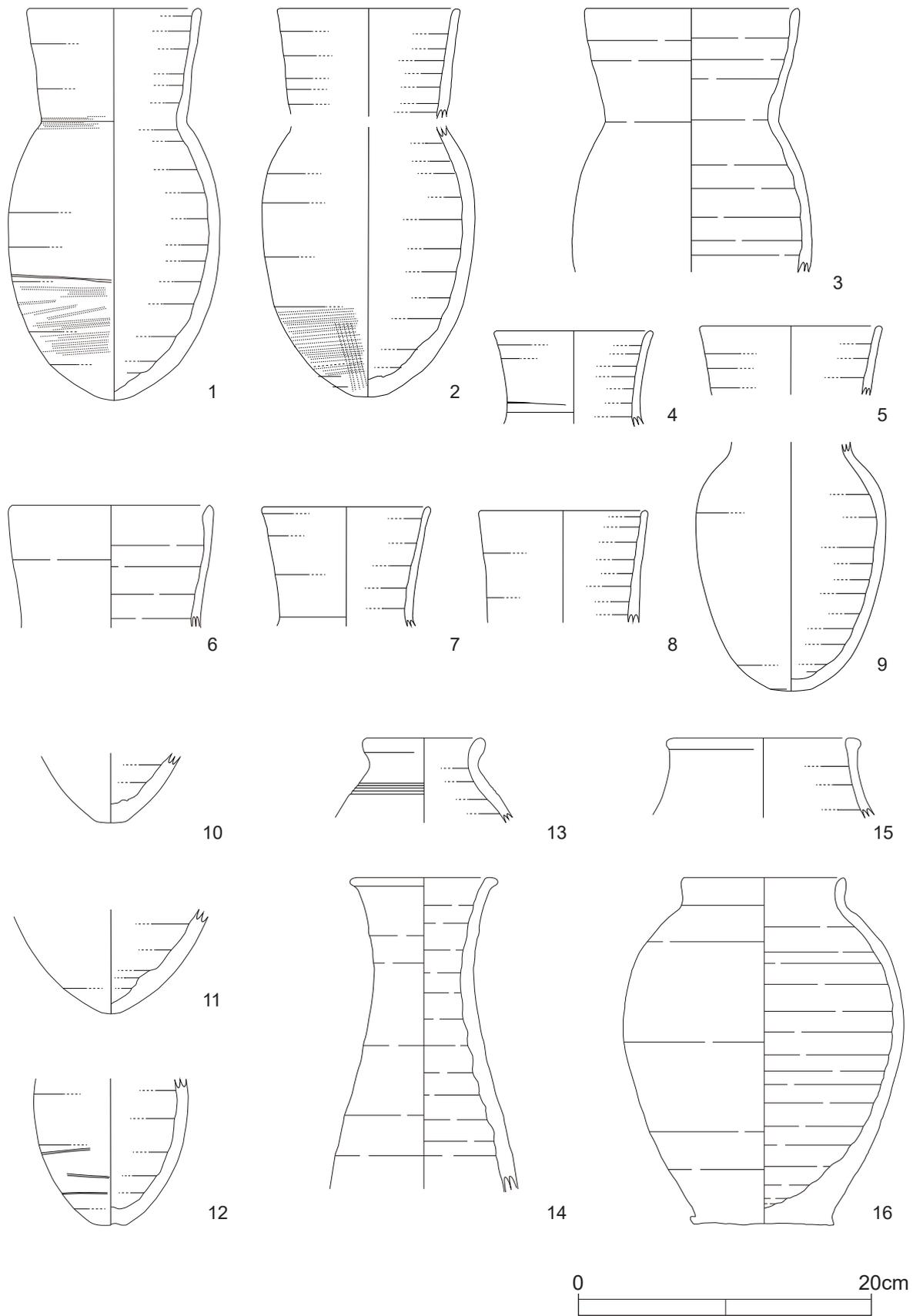


図20 シャフト137出土土器片  
Fig.20 Pottery vessels from Shaft 137

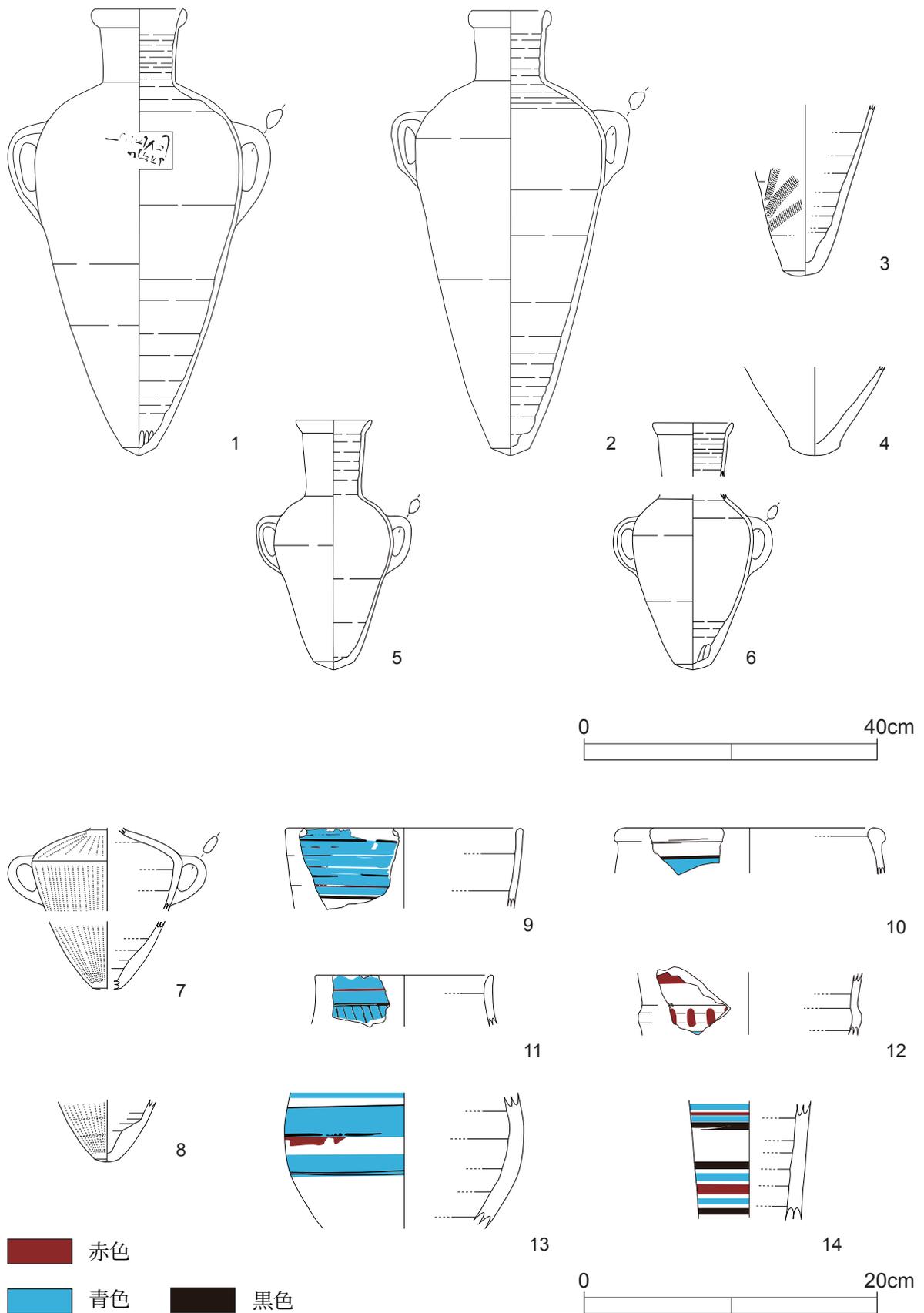


図21 シャフト137出土土器片  
Fig.21 Pottery vessels from Shaft 137

で掘具あるいは整形具として使用されていた可能性がある。図 21.5、21.6 は胎土 Marl D の小型のアンフォラで、D. アストンの Type B5 に相当し、同種の器形はアメンヘテプ 3 世からアクエンアテンの治世に年代づけられている (Aston 2004: 194-195, Fig.9)。図 21.7、21.8 は Marl D の極めて小型のアンフォラで、外面全面に渡って縦方向にミガキが施されていた。ミニチュアサイズのアンフォラの例としては、アマルナ出土の資料を挙げることができる (Rose 2007: 270, ME3.1-576)。図 21.9-13 は Nile B2 の彩文土器の断片である。図 21.11 はビーカー形の口縁部で、口縁直下に赤色の線が水平方向に描かれ、その下に黒色で彩文が施されている。サッカラのイニウイア墓やアマルナで出土しており、第 18 王朝後期に年代づけられている (Aston 2012: 150, Fig.VII.3.2; Rose 2007: 222, SF4-323, 324)。図 21.14 は Marl A4 の彩文土器で、黒、青、赤、青、黒の順で水平方向に帯が描かれていた。

特筆すべきは、黒色の樹脂状の液体が付着していた土器がいくつか発見されたことで、図 19.4、19.5 の平底鉢 (Nile B2)、図 21.5 のアンフォラがそれに該当する。後者には断面にも付着していたことから、樹脂がまだ液体の状態を保っていた段階で土器が割れたと推測される。底部に黒色の樹脂が残り、外に漏れ出しているアンフォラがサッカラのメリネイト墓で発見されており (Dunsmore 2014: 281)、イウルデフ墓ではビチュメンが入った状態で封がされたアンフォラが報告されている (Aston 1991: 52)。これらの樹脂がどのような目的で使用されたものなのかは不明である<sup>6)</sup>。

## (5) シャフト 138

### ①遺構の概要 (図 22)

シャフト 138 はグリッド 4E53b から 54a にまたがっており、開口部は南北 2.2m、東西 1.3m で、長軸の方向は南北に近い。シャフト部の深さは 5.6m、底から南へ地下室が掘削されている (A 室)。A 室は奥行き 2.4m、幅 1.2m、天井高 1.1m で、東側に壁龕を有する。壁龕は床面から高さ 0.6m に穿たれており、奥行き 0.5m、幅 0.7m、高さ 0.8m である。

シャフト部には風成と考えられる黄色の細砂が堆積しており、A 室には細砂にタフラと礫が含まれていた。すでに盗掘を受けており遺物の残存状況は悪く、土器片の他には人型木棺頭部の装飾に使用されていた黒色のファイアンス製品や、木製の杖の断片が出土した。土器片は中王国時代第 12 王朝アメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられるビール壺の口縁部断片が出土しており、シャフト 138 はこの時期の墓と考えられる。

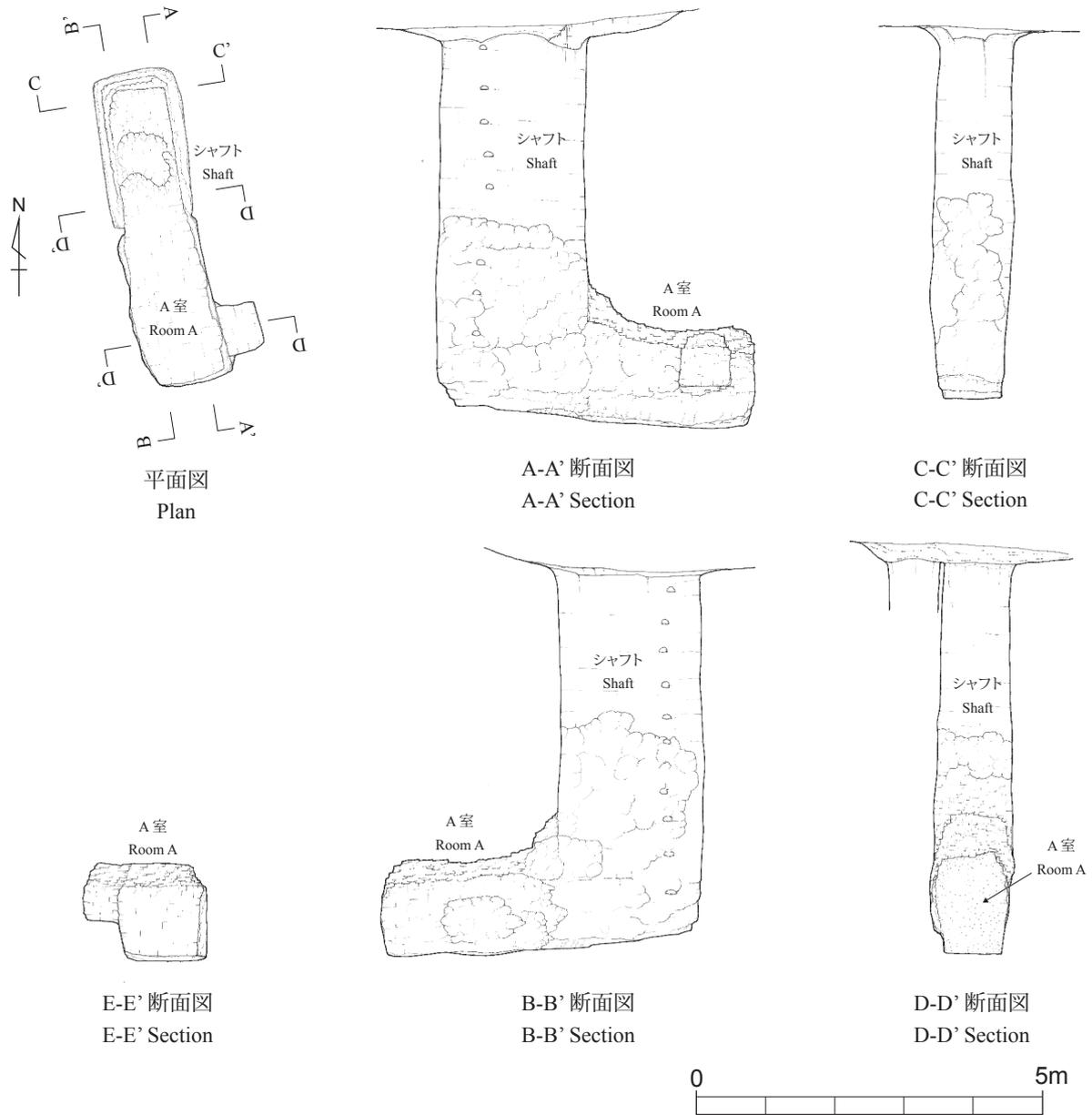
### ②出土遺物

#### a) ファイアンス製品 (図 23.1)

中王国時代の人型木棺の頭部に使用されていたと推測される黒色のファイアンス製品である。薄い半球形であり、球面部には縞状に筋が入っており、凸部分が白色になっている。平坦面には白色のモルタルが付着しており、この部分が棺の頭部との接着面である。前述のシャフト 134 で出土したファイアンス製品と同種のものだが、平面はこちらの方が真円に近い。

#### b) 木製杖片 (図 23.2)

A 室壁龕付近より発見された木製杖の断片であり、欠損部分から屈曲を持つ杖の一部であったと推定される。こうした木製の杖は、中王国時代の王族・高官の間で取り入れられていた「宮廷様式」(Court type) の埋葬でしばしば見られるものである<sup>7)</sup>。



c) 土器 (図 24)

図 24 はシャフト 138 から出土した特徴的な土器片で、全てシャフト部から出土した。図 24.1、24.2 はミニチュアの平底皿で、それぞれ Nile B1、Nile B2 である。図 24.3 は Nile C の大型の鉢、図 24.4 は Nile C のビール壺の口縁部である。R. シストルと A. ザイラーによる集成ではビール壺の Class 3b に相当すると考えられ、アメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に多い (Schiestl and Seiler 2012: 652-656)。

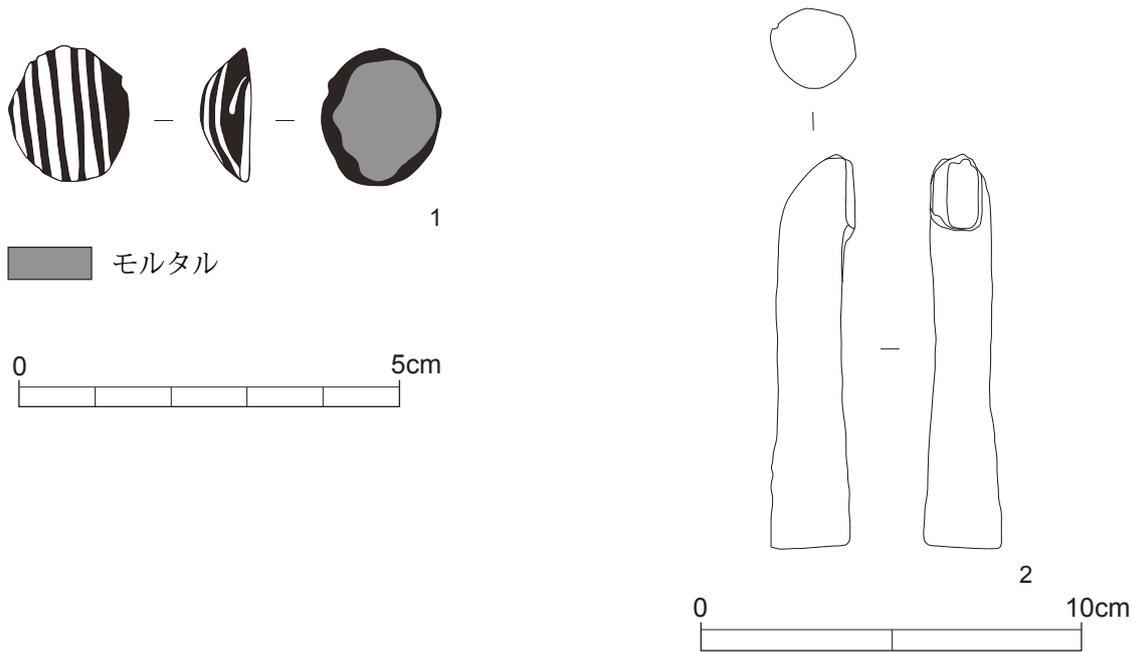


図23 シャフト138出土遺物  
Fig.23 Finds from Shaft 138

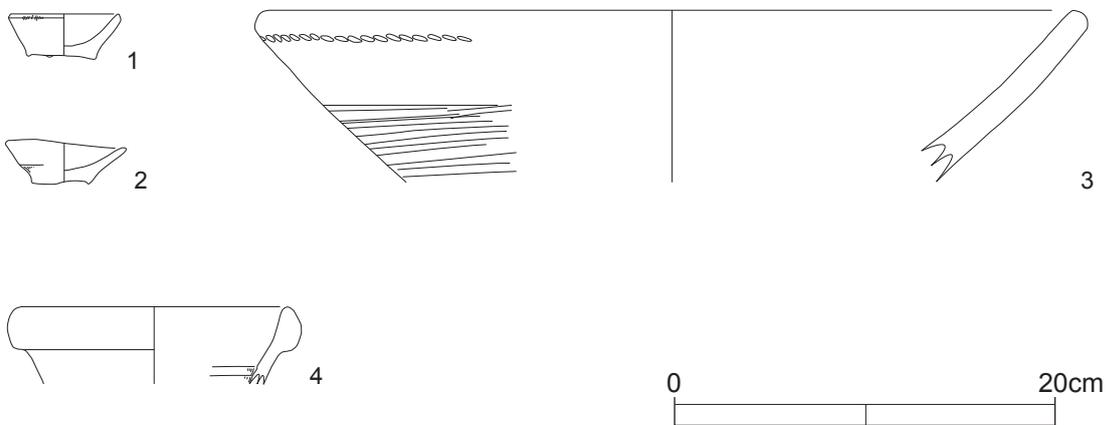


図24 シャフト138出土土器  
Fig.24 Pottery vessels from Shaft 138

## (6) シャフト139

### ①遺構の概要 (図25)

シャフト139はグリッド4E55bに位置しており、開口部平面の大きさは南北2.9m、東西1.4mで、長軸の方向は南北である。シャフト部の深さは6.2mで、底部から南側に地下室が設けられている(A室)。A室は奥行き2.7m、最奥部の幅が1.7m、天井高1.5mで、東壁に比較的大きな壁龕が穿たれている。壁龕のサイズは南北1.6m、東西0.7m、高さ0.7mである。

シャフト部は風成の細砂が堆積しており、A室内はタフラが混じった砂層に変わり、多くの遺物はA室

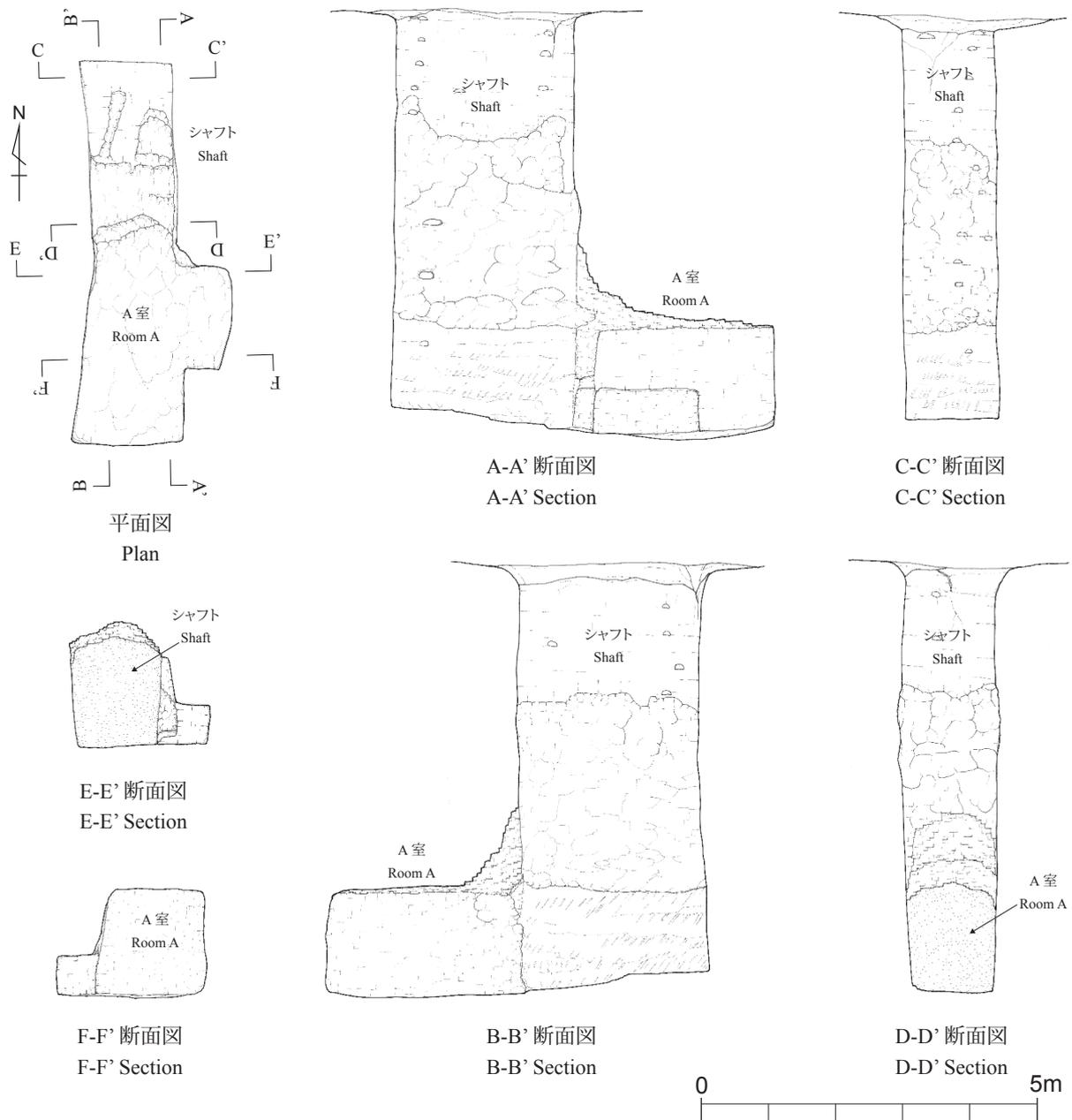


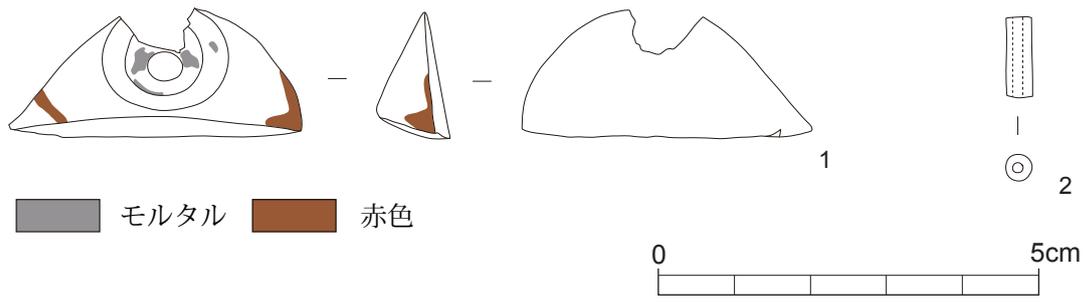
図25 シャフト139平面・断面図  
Fig.25 Plan and sections of Shaft 139

内から出土した。土器、人骨、ファイアンス製ビーズ、眼の象嵌などが出土し、埋葬の時期は土器からアメンエムハト3世治世から第13王朝初期に年代づけられる。金箔片も出土しており木棺やミイラマスク、あるいはその他の副葬品に使用されていたものと推測される。

②出土遺物

a) 眼の象嵌 (図26.1)

白色石製（おそらくトラバーチン）の白目部分の象嵌がA室より発見された。ミイラマスクあるいは人



■ モルタル ■ 赤色

図26 シャフト139出土小型遺物  
Fig.26 Small finds from Shaft 139

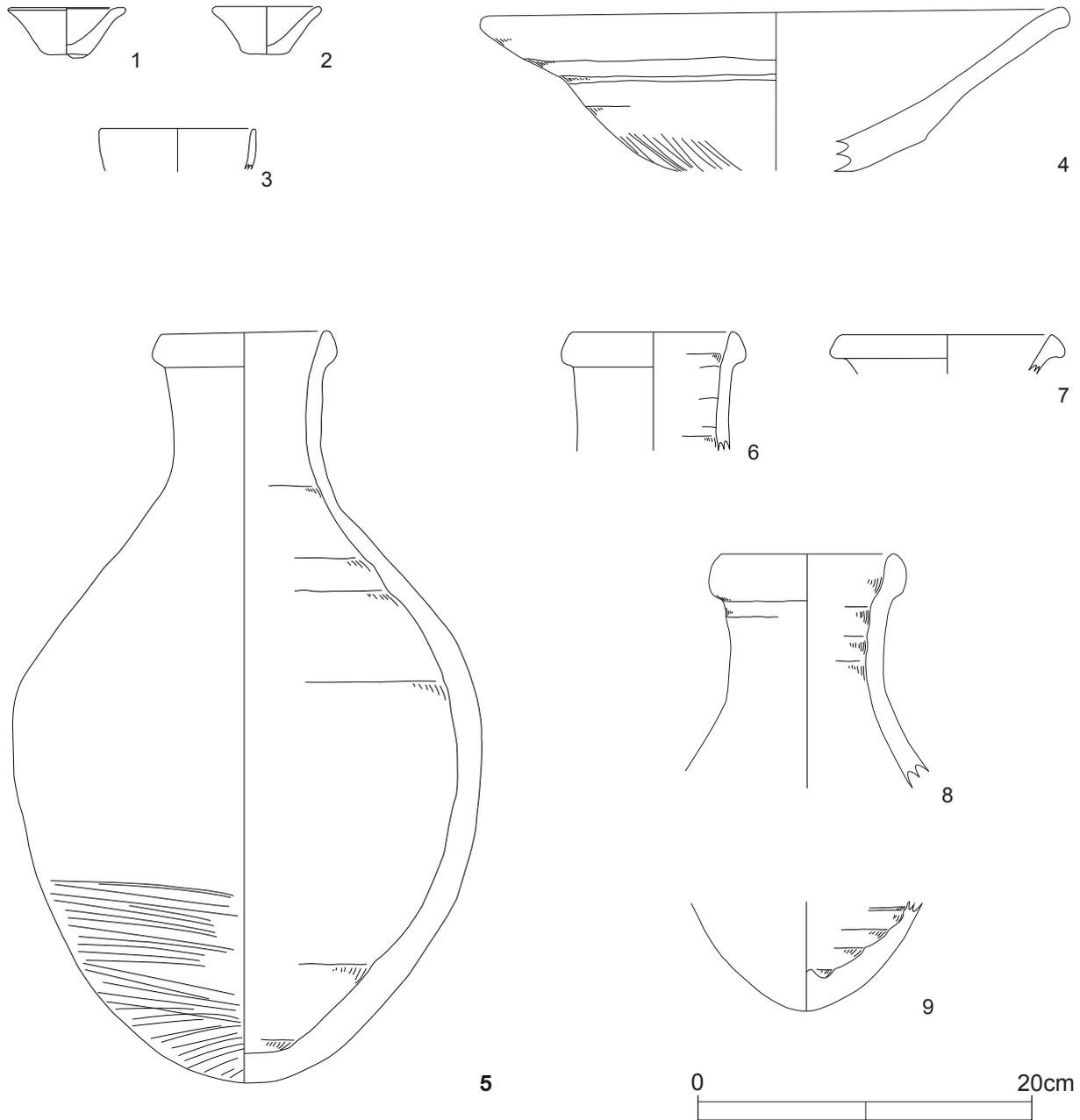


図27 シャフト139出土土器片  
Fig.27 Pottery vessels from Shaft 139

型木棺の眼にはめ込まれたと考えられるもので、虹彩の部分は失われていた。両端は赤く塗られており、虹彩をはめ込む部分には接着のためのモルタルが付着していた。眼の象嵌は、夕墓周辺では大型のシャフト墓でしか確認されておらず、本遺跡の被葬者でも比較的地位の高い人物の埋葬で使用されていたと推測されている（矢澤・吉村 2016: 204, 表 3）。

b) ファイアンス製ビーズ (図 26.2)

緑色ファイアンス製の円筒形ビーズで、シャフト部と A 室内から 11 点が出土した。長さは 9.5mm から 11.5mm で、いくつかは穿孔内に紐が残存していた。

c) 土器 (図 27)

掲載した主な器形は、図 27.2、27.8 を除いて全て A 室から出土した断片で構成される。図 27.1、27.2 は胎土が Nile C のミニチュアの平底碗で、後者はシャフト部より出土した。図 27.3 は Nile B2 の半球形の碗で、中王国時代の典型的な器形である。図 27.4 は大型の丸底鉢で胎土は Nile C であった。図 27.5-8 はビール壺であり、全て胎土は Nile C である。図 27.5、27.6 は R. シストルと A. ザイラーによる集成ではビール壺の Class 3d、図 27.7 は Class 3b に相当すると考えられ、アメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に多い器形である（Schiestl and Seiler 2012: 652-656, 660-661）。図 27.8 は Class 5 に該当すると考えられ、第 13 王朝第 1 四半期に年代付けられるが（Schiestl and Seiler 2012: 672-673）、この断片は地上のグリッド 4E55c から出土した土器と接合していることから、本来この埋葬に属するものではなく、盗掘後に混入した可能性がある。

(7) シャフト 140 (図 28)

シャフト 140 はグリッド 4E44a, c に位置しており、開口部平面の大きさは南北 2.2m、東西 0.6m で、長軸の方向はほぼ南北である。深さは 1.0m であり、四方の壁は日乾レンガによる壁体で囲まれていた。

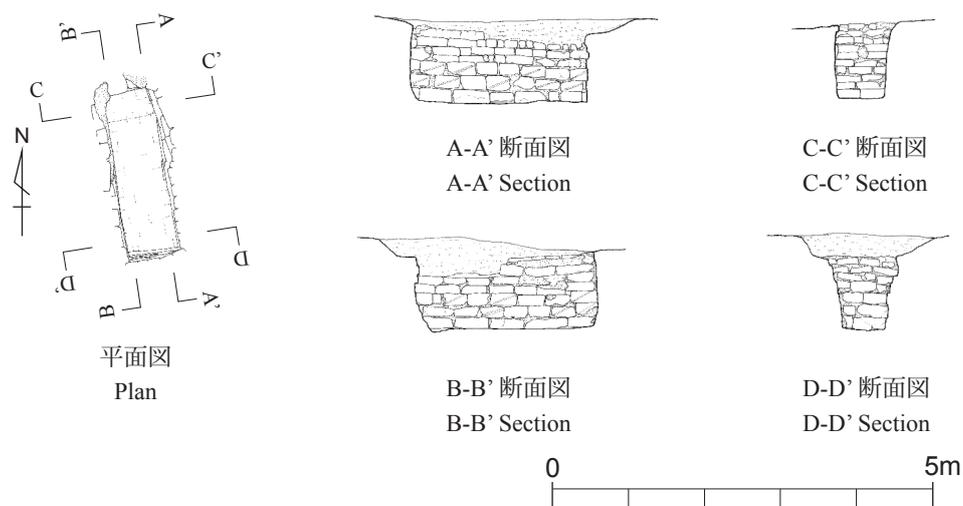


図 28 シャフト 140 平面・断面図  
Fig.28 Plan and sections of Shaft 140

少量の土器片が出土したが、全て表面が磨耗しており、本来この墓に納められたものではなく、外部から混入したもののように見受けられる。シャフトの床面の直上に木棺の底板と側板がわずかに残存していたが、保存状況が悪く、碑文・図像の有無については確認できなかった。北端部では短辺方向に角材があった痕跡が認められ、中王国時代の箱型木棺の底に配された部材の可能性がある。西側面の日乾レンガ列には床面から70cmのところまでタフラが水平に付着している箇所があり、タフラの上には側面の壁体とは別の日乾レンガが付着していた。おそらく、シャフトに箱型の木棺が置かれた後に、タフラで埋め、その上に日乾レンガで蓋をした痕跡と推測される。

## (8) シャフト 141

### ①遺構の概要 (図29)

シャフト 141 はグリッド 4E55c に位置しており、開口部平面の大きさは南北 2.2m、東西 0.9m で、長軸の方向は南北である。シャフト部の深さは 3.5m であり、北側が約 40cm 高くなっていた。

シャフトの底部付近にはタフラの層があり、その上には細砂が堆積していた。地下室はないものの、人骨が出土していることから墓として使用されていたと考えられる。

### ②出土遺物

出土した土器の主要な器形を図 30 に示した。図 30.1-3 は半球形の碗で、中王国時代の典型的な器形であ

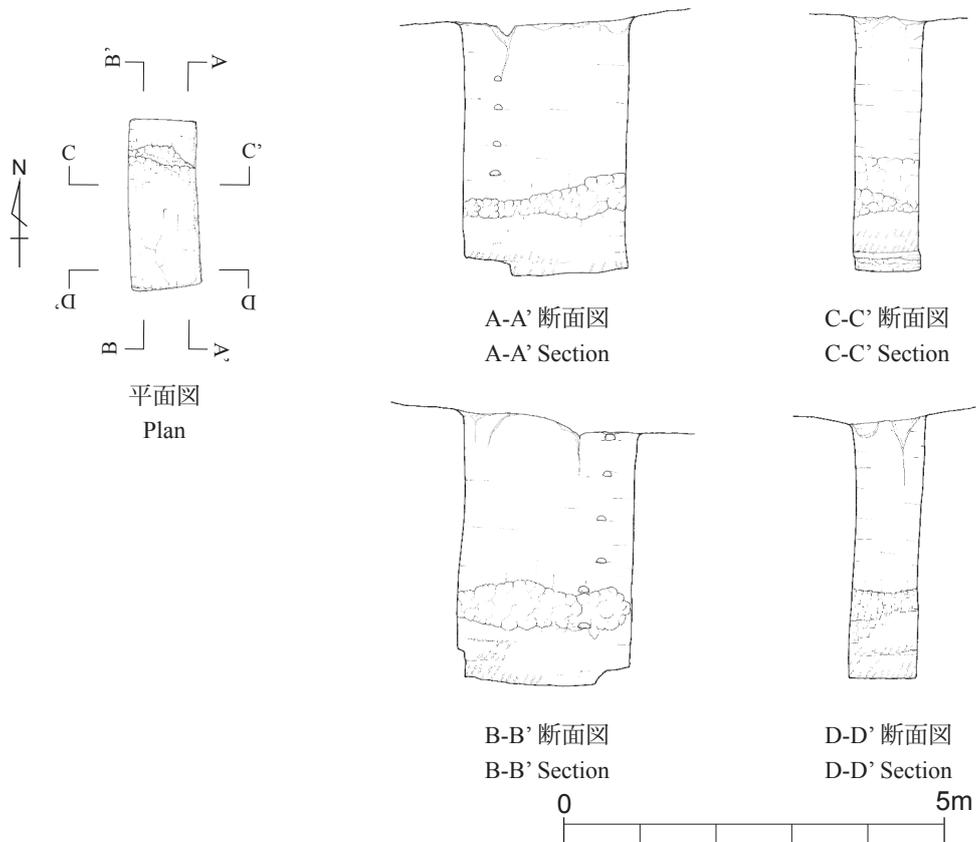


図 29 シャフト 141 平面・断面図  
Fig.29 Plan and sections of Shaft 141

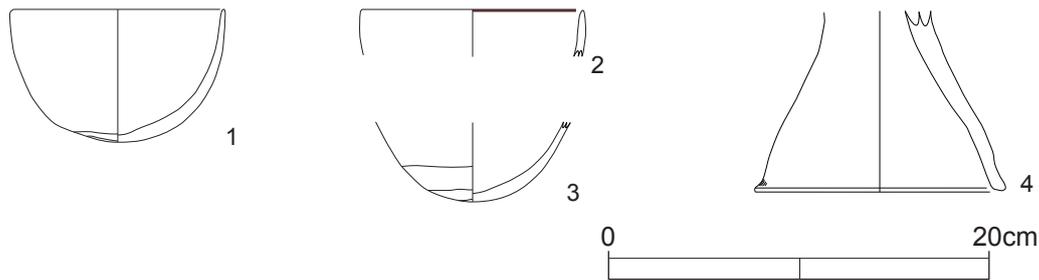


図 30 シャフト 141 出土土器片  
Fig.30 Pottery vessels from Shaft 141

る。図 30.1 の胎土は Nile B1 で、ベッセル・インデックス（最大径 / 器高 x 100）は 162 を示し、第 12 王朝末から第 13 王朝初期に年代付けられる（Arnold 1988: 140; Schiestl and Seiler 2012: 84-87, Group 3）。図 30.2 は Nile B2 で、口縁上部に赤彩が施されていた。図 30.3 は半球形碗の底部断片で、胎土は Nile B2 だった。図 30.4 は Nile C の高台の断片で、形状からインセンス・バーナーの一部と推測される。

## (9) シャフト 142

### ①遺構の概要（図 31）

シャフト 142 はグリッド 4E55c に位置しており、開口部平面の大きさは南北 1.8m、東西 0.9m で、長軸の方向は南北である。シャフトの深さは 9.0m であり、シャフト部は深さ約 7m のところでわずかに狭くなっている。また深さ約 2m から 5m の範囲では岩盤が脆く、表面にモルタルを貼って補修したような跡が観察された。シャフトの最下部から南と北に地下室が設けられており、それぞれ A 室、B 室とした。A 室の平面はほぼ矩形で南北方向が 2.4m、東西方向は最大で 2.4m、天井高は 1.2m であった。B 室の平面は矩形で南北 3.1m、東西 2.5m、天井高は 1.1m であった。夕墓周辺では開口部の長軸が南北を示す墓は中王国時代、東西を示す墓は新王国時代という傾向がはっきりしていたが、このシャフトは開口部が南北でありながら後述するように新王国時代の埋葬が認められた。しかし、シャフトが途中から細くなっている点や、岩盤が脆くなっている部分にモルタルで補修がされている点などから、部屋を持たない中王国時代のシャフトが改変され、再利用されていた可能性も考えられる。

シャフト部、A 室、B 室には風成の細砂が堆積していた。シャフト部の床面付近、東壁際から石製容器を模倣した双耳の壺がほぼ完形で出土した。断片から復元されたもう 1 個体の土器と合わせて、同形状の一对の土器として製作されたようであり、白色を背景に一方は赤色で表面の彩色が描かれ、他方は黒色で描かれていた。同じレベルではシャフト部南側から A 室入口にまたがる位置に、人骨とともに人型木棺の断片が出土した。全体が黒色で塗られた蓋の足部と、本体部分の頭頂であり、碑文や図像の部分は彫刻で表現されていた。蓋に残存していた碑文から棺の持ち主は「ネブセニイ」であることが判明した。同じくシャフト部床面付近の砂層から木製シャブティが 1 点出土した。B 室からは陶製のカノポス壺が発見されており、床面の直上からは皿形土器が天地逆の状態出土し、その下からは供物と推測される植物遺存体が発見された。A 室、B 室から土器片や木棺片などが出土しているが、主要な遺物はシャフト部で確認されており、盗掘時に部屋からシャフト部側に引き摺り出された状況を示していると推測される。後述するように、石製容器の模倣土器はテーベのチャヌニ墓から酷似した例が出土しており、トトメス 4 世治世に年代づけられる。その他の陶製カノポス壺や土器も第 18 王朝中期の様相を示していることから、シャフト 142 はダハシュール北遺跡でこれまでに確認されている新王国時代の埋葬の中でも特に古い段階に位置付けられる。また、石製容

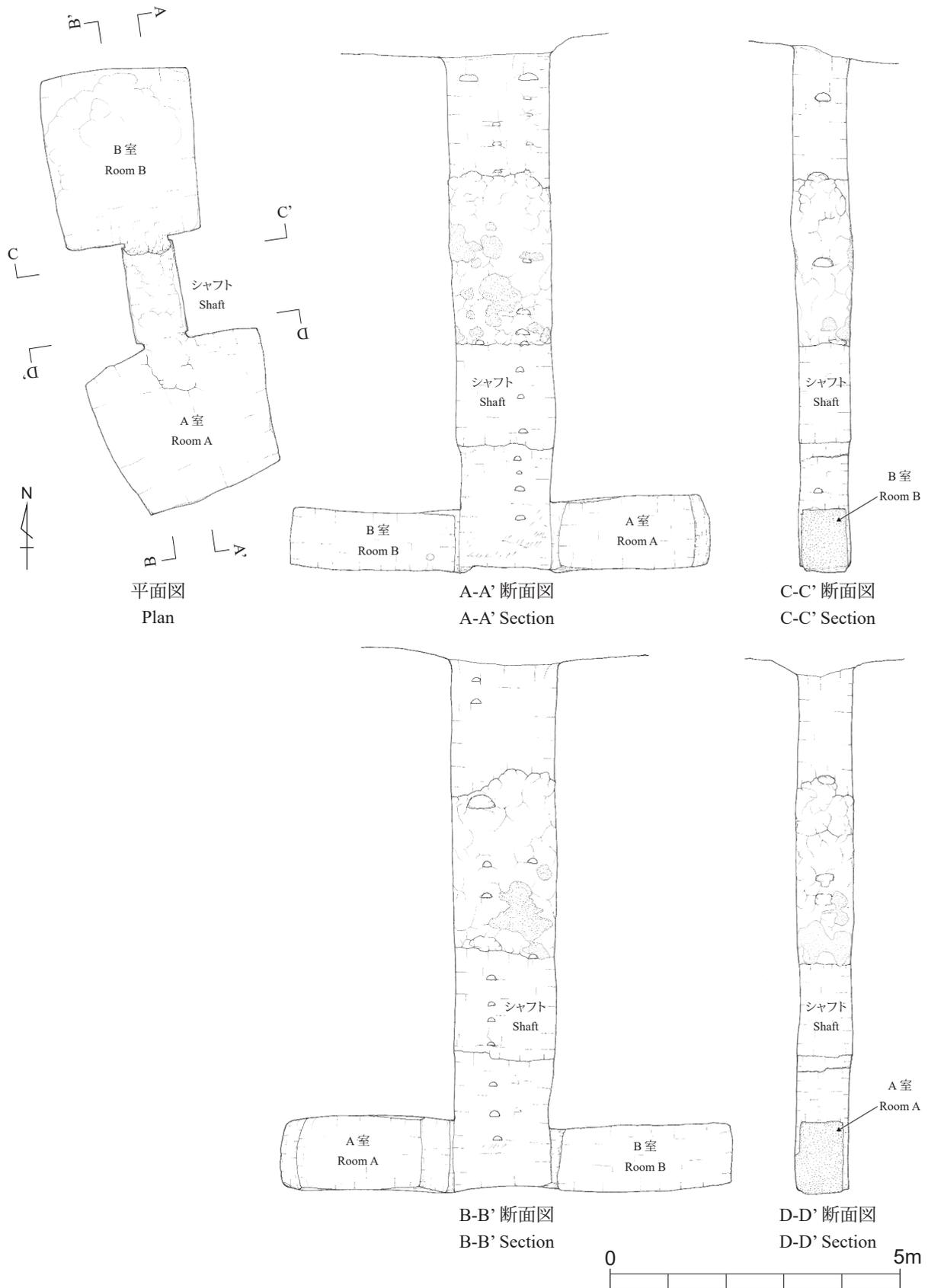


図31 シャフト142平面・断面図  
 Fig.31 Plan and sections of Shaft 142

器の模倣土器はテーベ地域特有のものであり、メンフィス地域での報告はおそらく初出となる。陶製のカノポス壺もテーベで類似するものが見られるなど、本遺跡とテーベ地域との関連を示す重要な証拠と言える。また、石製容器の模倣土器はテーベ地域特有のものであり、メンフィス地域での報告はおそらく初出となる。陶製のカノポス壺もテーベで類似するものが見られるなど、本遺跡とテーベ地域との関連を示す重要な資料と言える。

## ②出土遺物

### a) 木棺片 (図 32、33)

図 32 は人型木棺の蓋の、足に当たる断片であり、碑文と図像が描かれた部分以外は外面全体に黒色の樹脂が塗られていた。碑文、図像は彫刻によって表現されている。足の甲側部分 (図 32 上) には 1 行の銘文帯が中央に配され、足裏に当たる部分 (図 32 下) はイシス女神の図像を挟んで向かって右側は 3 行、左側は 2 行の碑文が刻まれていた。碑文には所有者の名前「ネブセニイ」が含まれており、碑文の内容は W.C. ハイズによる Text 22 に相当すると考えられ (Hayes 1935: 190)、同様の碑文は第 18 王朝初期の王族の石棺や、アメンヘテプ 3 世治世、ポスト・アマルナ期の非王族の棺でも認められる (Kozloff 1992: 317; Schneider 2012: 115, Fig.IV.6)。図 33 は同じ場所から出土した人型木棺の身の頭頂に当たる部分であり、シェンの輪を持ち「ネブウ」のサインの上に膝をついたネフティス女神の図像が彫刻によって表現され、その両側に碑文が刻まれていた。碑文、図像には青、赤、黄褐色で彩色が施されていた。頭頂の両端には頭巾を表現した装飾と思われる青色による縞状の彩色が一部残存していた。

### b) 木製シャブティ (図 34)

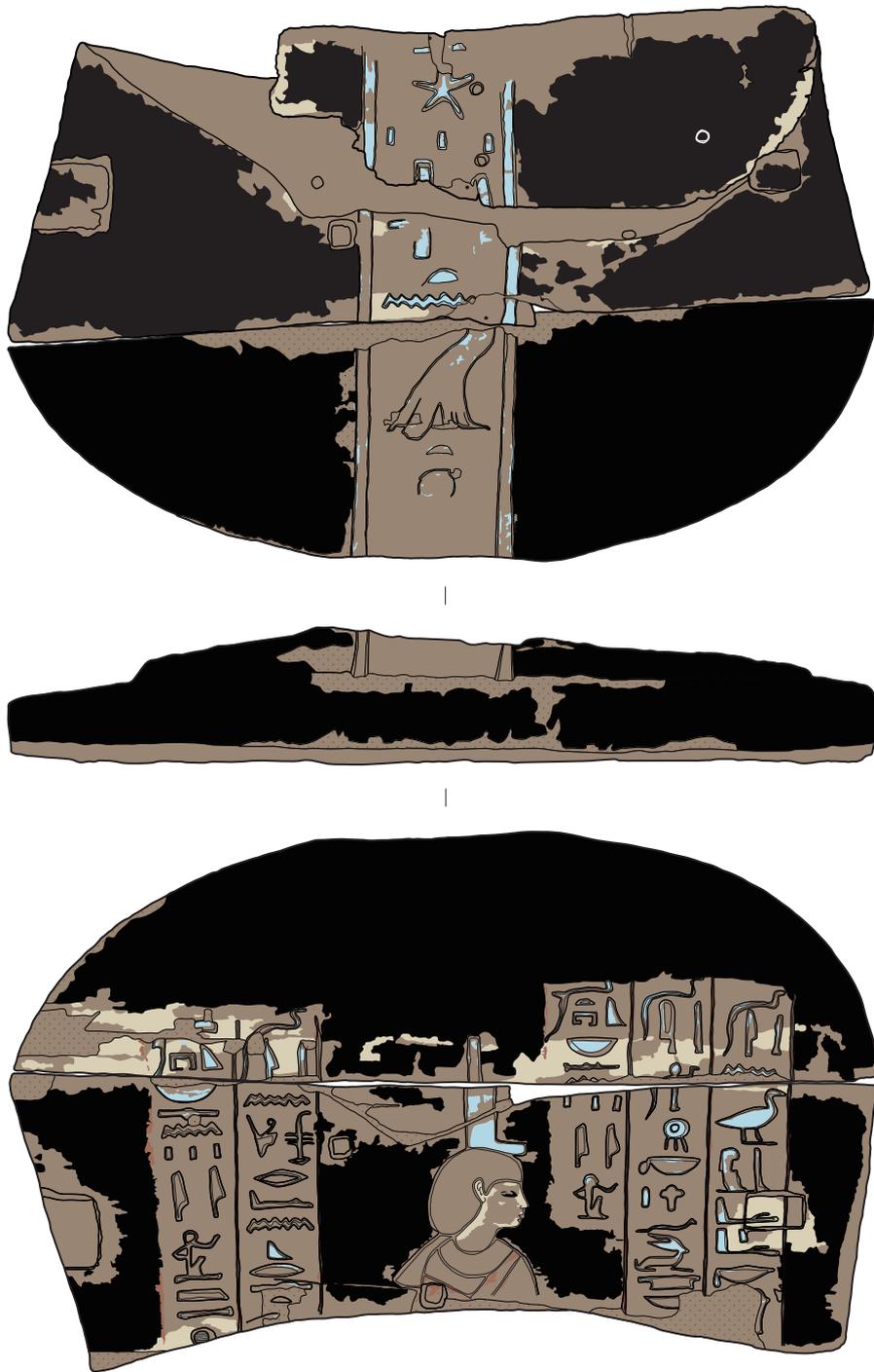
図 34 はシャフト部から発見された木製シャブティで、保存状態は悪く、胴下部は失われていた。ミイラ形で青色の縞状の彩色を持つ鬘を有し、髭や手の装飾は見られず、襟飾りが青色と赤色で描かれていた。その下には横方向に書かれた碑文が一部残っており、赤色の平行線で行が区切られていた<sup>8)</sup>。

### c) 陶製カノポス壺 (図 35)

図 35.1 は人型の頭部の蓋を持つ陶製カノポス壺で、轆轤で成形されており内部は空洞で、頭部とはめ込み部分は別々に作られた後につなぎ合わされている。頭部の表面には粘土が継ぎ足され、顔や耳、ラペットなどの細部が形作られていた。鬘部分には青色による縞状の彩色があり、おそらく焼成後に顔料が塗布されたと考えられ、顔料の土器表面への吸着は脆弱であった。テーベのセンネフェリ墓 (TT99) の Shaft I から出土した例は、形状や成形技法の点で類似している。センネフェリ墓で相伴していた土器群はトトメス 3 世治世中期から後期にかけてのエリート層の埋葬で見られるものである (Rose 2016: 193-194, 198, Fig.157)。図 35.2 はカノポス壺の容器であり、平底で肩が張っており、頸部を持たない。表面が白色で塗られ、その上に黒い斑点模様が付けられており、石製容器の表面を模倣したものと考えられる。表面には垂直方向に少なくとも 3 行の碑文が書かれていた痕跡がわずかに残っているが、内容は明らかではなかった。

### d) 石製模倣土器 (図 36、37)

平底で長い頸部を持ち、口縁部は円板状、左右対称の把手を有する一対の土器で、円板状の蓋を有する。全体が白色で覆われ、一方は黒、他方は赤で表面に文様が描かれており、石製容器の表面を模倣したものと考えられる。赤で彩色された方はシャフト部の床面付近の砂層からほぼ完形の状態で出土し、蓋は A 室か



- |   |    |   |      |
|---|----|---|------|
|  | 黒色 |  | 欠損部  |
|  | 赤色 |  | 黄褐色  |
|  | 青色 |  | 木材表面 |

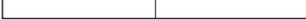
0  20cm

図32 シャフト142出土人型木棺片  
 Fig.32 Fragment of wooden anthropoid from Shaft 142

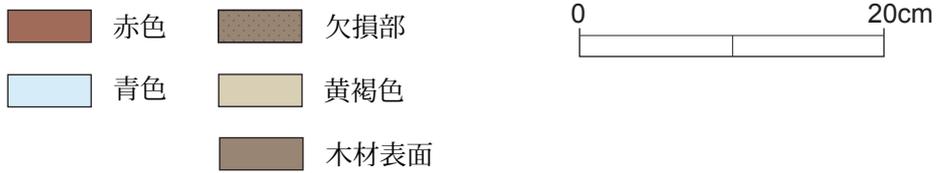


図33 シャフト142出土人型木棺片  
Fig.33 Fragment of wooden anthropoid from Shaft 142

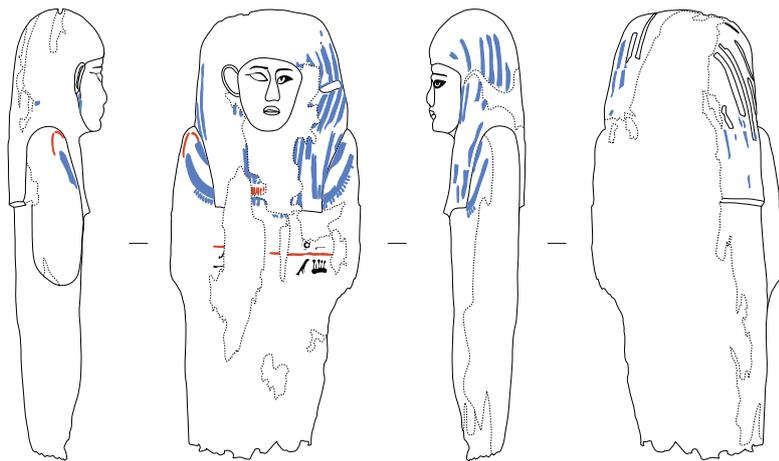


図34 シャフト142出土木製シャブティ  
Fig.34 Wooden shabti from Shaft 142

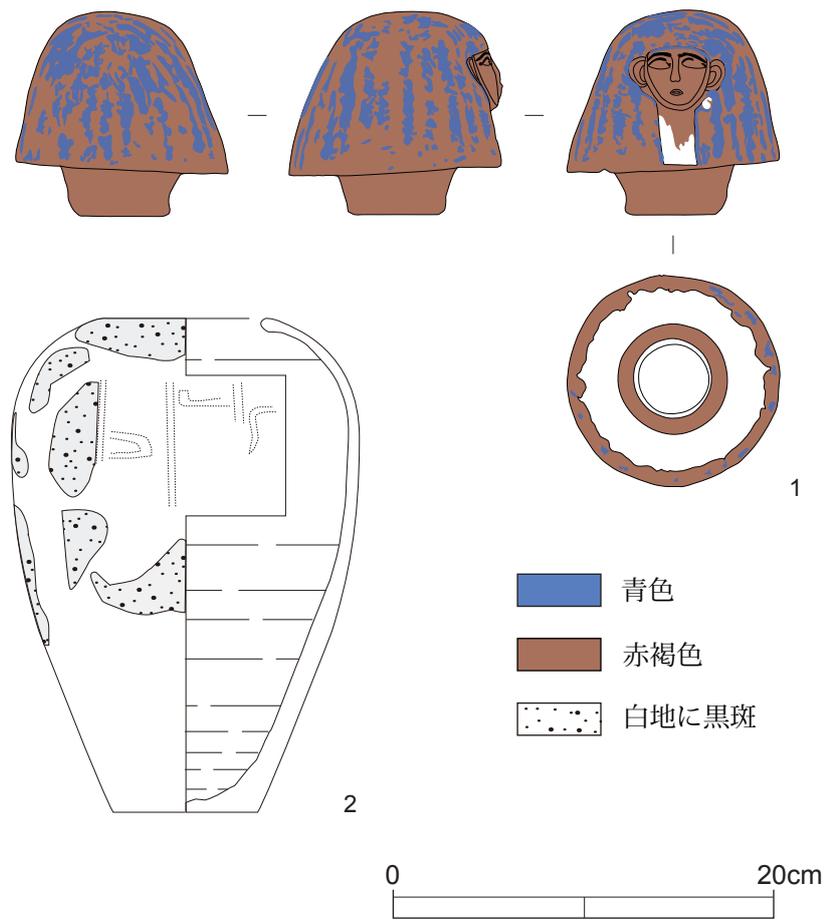


図35 シャフト142出土陶製カノポス壺  
Fig.35 Pottery canopic jar from Shaft 142



図36 シャフト142出土石製模倣土器  
Fig.36 Pottery imitation of stoneware from Shaft 142

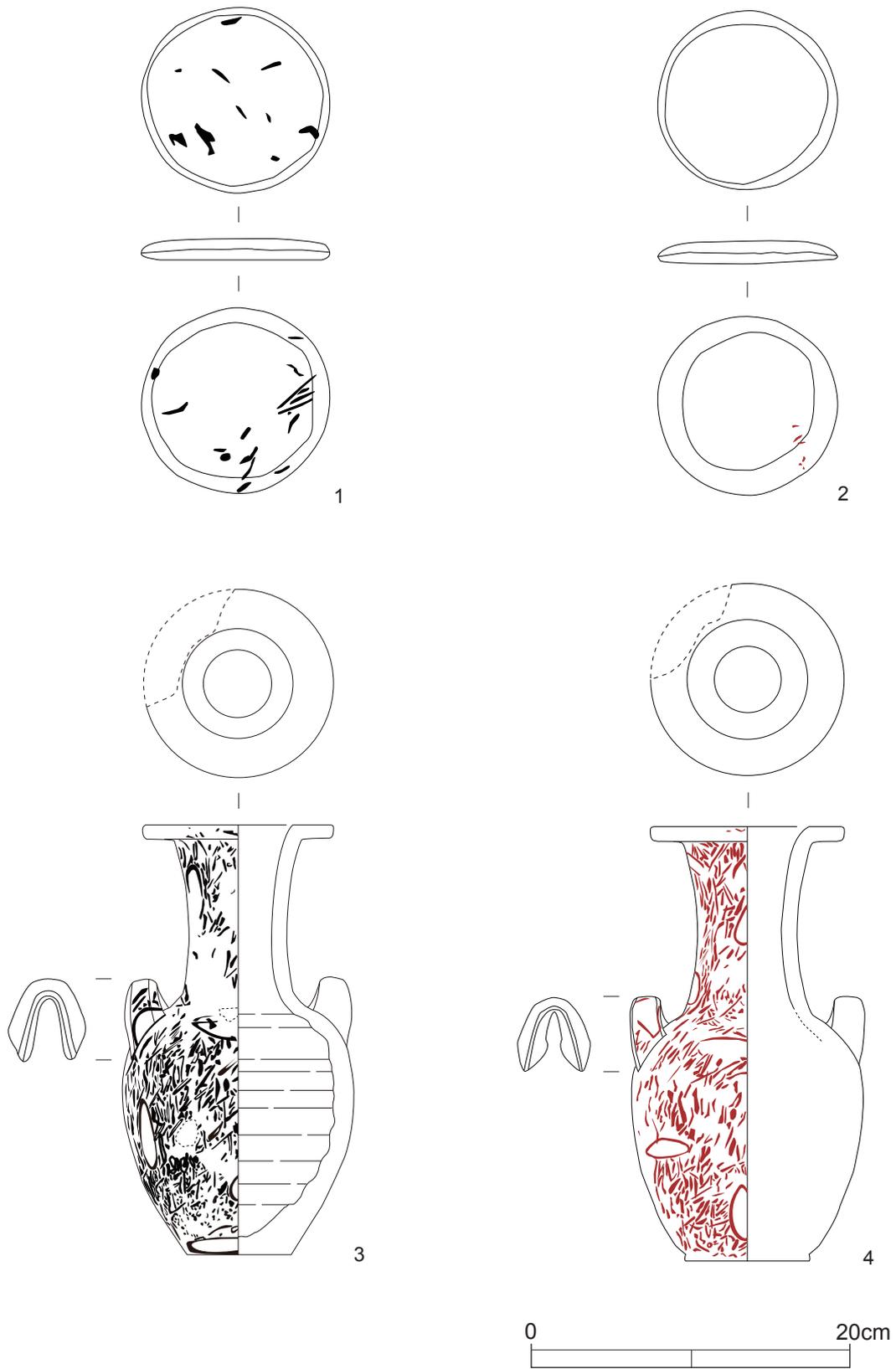


図 37 シャフト 142 出土石製模倣土器  
Fig.37 Pottery imitation of stoneware from Shaft 142

ら発見された。黒で彩色された方は A 室で発見された断片から復元されたため、両者は本来 A 室にあった可能性が高い。この土器と酷似した器形、彩色を持つ例がルクソールのチャヌニ墓 (TT74) から出土しており、トトメス 4 世治世に年代づけられる (Brack and Brack 1977: Tafel.14.a, b)<sup>9)</sup>。こうした石製容器あるいはガラス製容器を模倣した土器の発見はほぼルクソール西岸に限定されており (Rose 2003: 204-205)、メンフィス地域では知られていない。胎土は Marl A4 の例がよく知られており (Rose 1996: 170; Bourriau et al. 2005: 59)、本例も Marl A4 に分類される。

e) 土器 (図 38)

シャフト 142 の土器は新王国時代のものが主だが、中王国時代のものがわずかに混在していた。図 38.2、38.3 はシャフト部から発見された中王国時代の典型的な器形である半球形碗であり、胎土は Nile B2 であっ

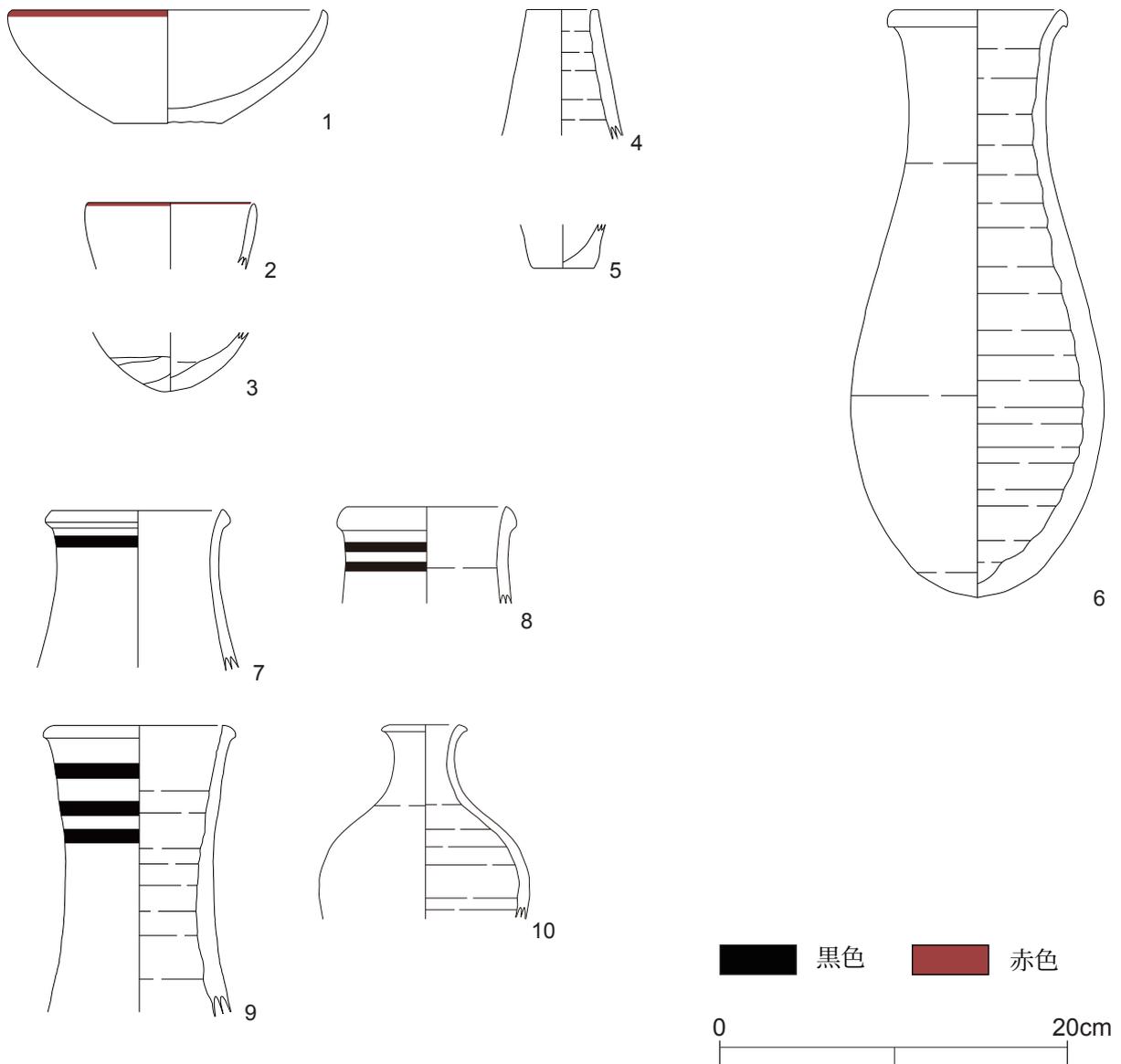


図 38 シャフト 142 出土土器片  
Fig.38 Pottery vessels from Shaft 142

た。図 38.10 は B 室から発見された Nile B2 の壺であり、第 12 王朝によく見られる器形の断片と推測される (Schiestl and Seiler 2012: 994-995, Type IV.2.C.16)。しかし壺の表面は磨耗が激しかったため、長期間風雨にさらされた後混入した土器片である可能性も捨てきれない。図 38.1 は B 室の床面直上から出土した平底の鉢であり、口縁部に赤彩が見られる。図 38.6 はシャフト部でほぼ完形の石製容器の模倣土器 (図 37.4) と同じ場所から出土した長頸、丸底の壺であり、胎土は Nile B2 でアメンヘテプ 2 世からトトメス 4 世治世頃まで見られる器形である (Rose 2016: 297, Fig.270.III.1)。図 38.7-9 は Nile B2 の壺形で、上部に黒色で水平方向の帯の彩色が施されており、シャフト部と A 室から出土した断片で構成される。黒、褐色あるいは暗赤色の単色による線形の彩色を持つ土器は、第 2 中間期後期から第 18 王朝中期にかけて見られ、第 18 王朝後期にはほとんど見られなくなると言われている (Hope 1989: 7)<sup>10)</sup>。

## (10) シャフト 143

### ①遺構の概要 (図 39)

シャフト 143 はグリッド 4E54d に位置しており、開口部平面の大きさは南北 2.7m、東西 1.3m で、長軸の方向は南北である。シャフト部の深さは 7.2m であり底部から南に部屋が設けられていた (A 室)。A 室は奥行き 3.0m、幅 1.3m、天井高 1.6m であり、東側に壁龕が掘削されていた。壁龕の床面は A 室の床のレベルとほぼ同じで、サイズは幅 (南北) 0.6m、奥行き (東西) 0.5m、高さ 0.8m であった。

シャフト上部は黄色の細砂が堆積しており、シャフト部北西コーナーの深さ 2.5m 付近で北側に隣接するシャフト 146 シャフト部へつながる穴が発見された。開口部には石灰岩片と布が詰められており、穴が意図的に塞がれていたと考えられる。深さ 4.5m 付近からタフラが多く混じるようになり、同レベルから石灰岩の建材の断片が出土した。その下から木製のカノポス壺の蓋が 2 点出土した。A 室はすでに盗掘を受けており土器片、木製杖の断片、木棺片、人骨、トラバーチン製の石製容器片などが出土した。土器は中王国時代の典型的な器形で占められており、ビール壺の口縁部断片はアメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期によく見られる器形であり、この墓も同時期のものと考えられる。

### ②出土遺物

#### a) 木製カノポス壺 (図 40)

木製のカノポス壺の蓋が 2 個体、シャフト部の深さ 4.5m、北東コーナー部分からまとまって出土した。両者とも極めて保存状態が悪く、一部が欠損していた。白色のプラスタが下地として全体に塗布されていた痕跡があり、図 40.1 は黒色で眼や眉が描かれ、頭部の装飾として青い縞状の彩色が施されていた跡が観察された。対となる容器の部分は確認されなかった。

#### b) 木製杖 (図 41)

A 室の入口付近から発見された木製杖の上端部分と考えられる断片であり、ウアスと呼ばれる杖の一部と考えられる。このタイプの杖は、シャフト 138 と同様に中王国時代の王族・高官の間で取り入れられていた「宮廷様式」(Court type) の埋葬でしばしば見られるものである<sup>11)</sup>。

#### c) 土器 (図 42)

図 42.1-4 は焚香に使用されたと考えられる高台付きの鉢で、全て胎土は Nile C でシャフト部から出土した。図 42.1 には内面に黒斑が観察された。図 42.5、42.6 は中王国時代の半球形碗であり、前者は Nile B2 で A

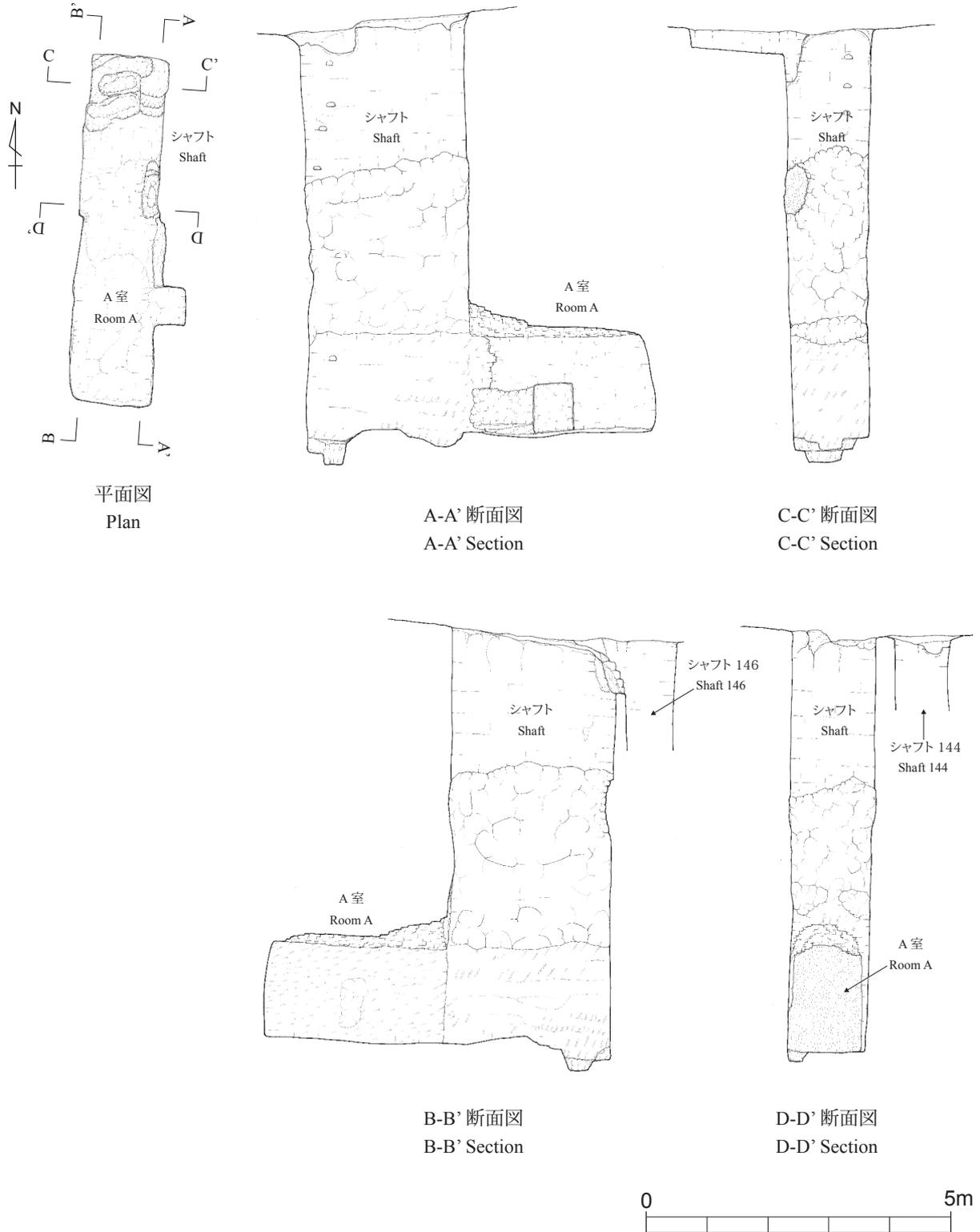


図39 シャフト143 平面・断面図  
Fig.39 Plan and sections of Shaft 143



図40 シャフト143出土木製カノボス壺蓋  
Fig.40 Wooden canopic jar lids from Shaft 143

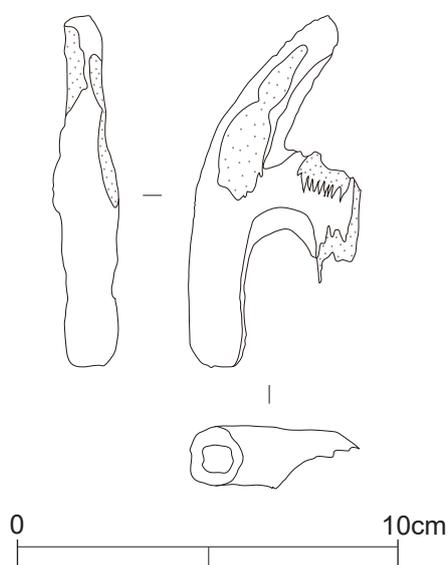


図41 シャフト143出土ウアス杖片  
Fig.41 *W3s* scepter fragment from Shaft 143

室から出土しており、後者は Nile B1 で口縁頂部に赤彩があり、シャフト部で発見された。図 42.7 は平底でおそらくピーカー形か壺形の土器であり、胎土は Nile B2、A 室から出土した。図 42.8 は胎土が Marl C2 の球状の胴部を持つ壺であり、シャフト部から出土した。口縁部は轆轤で成形されているが、胴部は輪積みで作られており、両者は別々に作られた上でつなぎ合わされている。内面は垂直方向に指で調整した痕が見られ、外面は斜め方向にケズリで調整されていた<sup>12)</sup>。Marl C によるこの器形は、センウセト 1 世治世後半から第 13 王朝中期の長い期間に渡って使用されていた (Schiestl and Seiler 2012: 380)。図 42.9 は中王国時代のビール壺の口縁部であり、R. シストルと A. ザイラーによる集成では Class 3b に相当すると考えられ、アメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に多い器形である (Schiestl and Seiler 2012: 652-656)。

#### (11) シャフト 144

##### ①遺構の概要 (図 43)

シャフト 144 はグリッド 4E54c に位置しており、開口部平面の大きさは南北 1.9m、東西 1.0m で、長軸の

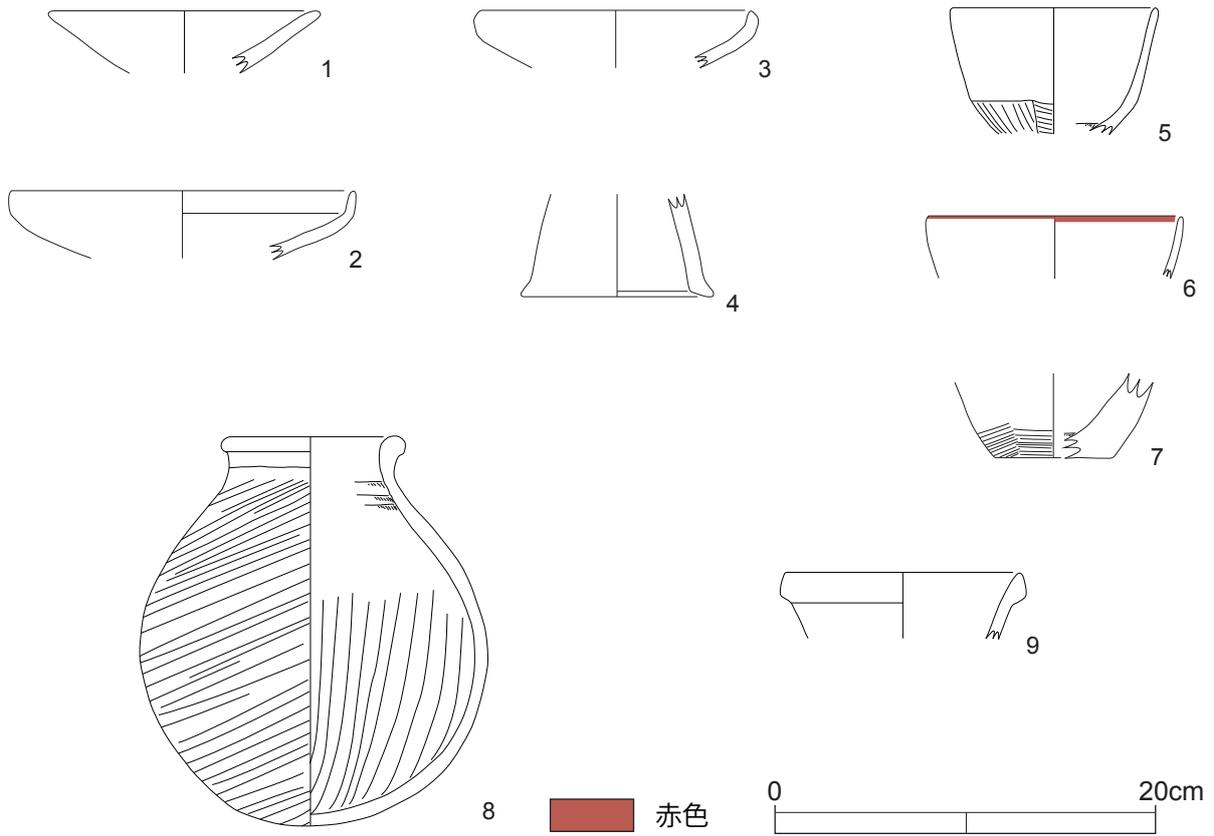


図42 シャフト143出土土器片  
Fig.42 Pottery vessels from Shaft 143

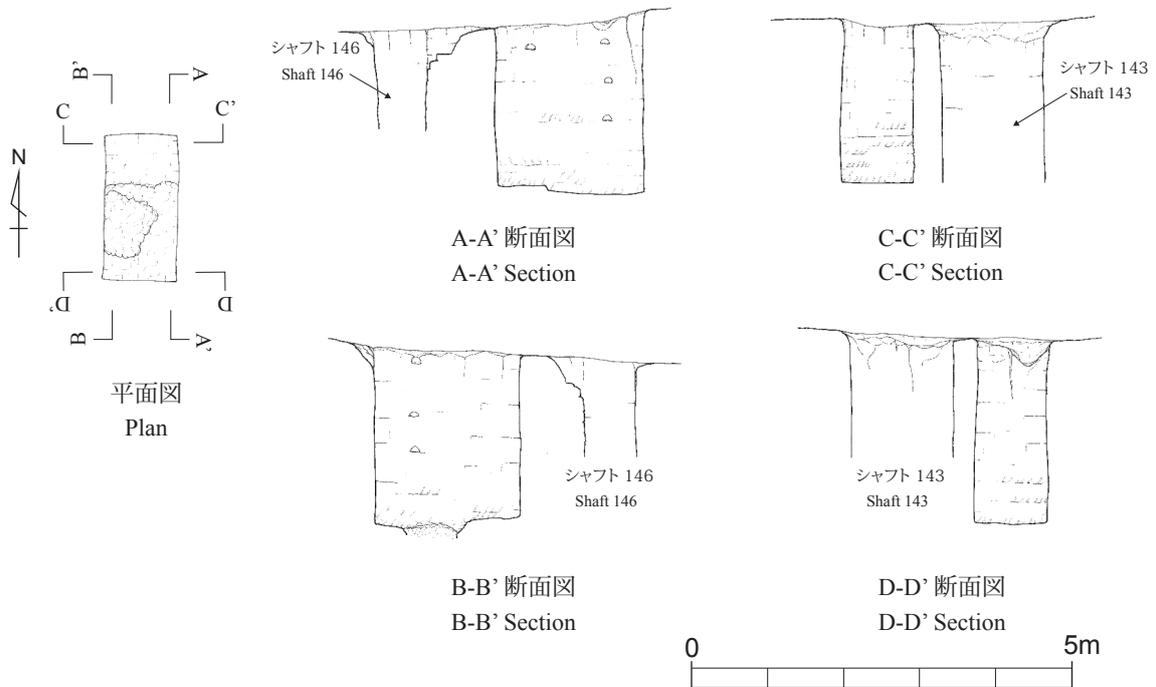


図43 シャフト144平面・断面図  
Fig.43 Plan and sections of Shaft 144

方向は南北である。シャフト 143 と並ぶように近接して作られており、南端のラインも揃えられているように見受けられる。こうした配置は偶然とは考えにくく、シャフト 143 か 144 のどちらか一方が他方に揃えて作られたと考えられる。シャフト部の深さは 2.4m で地下室を持たず、底部では隣接するシャフト 145 の地下室と接触し穴が開いていた。

シャフト内部は風成の細砂で満たされており、土器以外の遺物は木片のみであり、明確な埋葬の痕跡は認められなかった。出土した土器は新王国時代のものだが、隣のシャフト 143 は明らかに中王国時代の墓であり、シャフト 144 と 143 のどちらか一方が他方に合わせて作られたのであれば、144 も中王国時代に作られたと考えられる。

## ②出土遺物 (図 44)

図 44.1 は新王国時代の「ビール壺」と呼ばれる器形で、胎土は Nile B2、B. アストンによる分類では Type II.2 に該当し、第 19 王朝前半に見られる (Aston 2011: 217-221)。図 44.2 は胎土が Marl B の彩文土器であり、彩文は青、赤、暗褐色で構成される。

## (12) シャフト 145

### ①遺構の概要 (図 45)

シャフト 145 はグリッド 4E54c に位置しており、開口部平面の大きさは南北 1.6m、東西 1.0m で、長軸の方向は北西-南東である。シャフト部の深さは 2.9m であり、底部から南に部屋が掘削されていた (A 室)。シャフト部の東側側面には、隣接するシャフト 146 のシャフト部へと続く穴が発見された。A 室の奥行きは 2.5m、幅 0.7m、天井高 0.8m であり、シャフト部よりも幅が狭い。A 室の天井はシャフト 144 の床面と接しており、貫通していた。

シャフト上部の堆積は主に風成の細砂のみだったが、下部ではタフラが混じるようになり、A 室内部まで

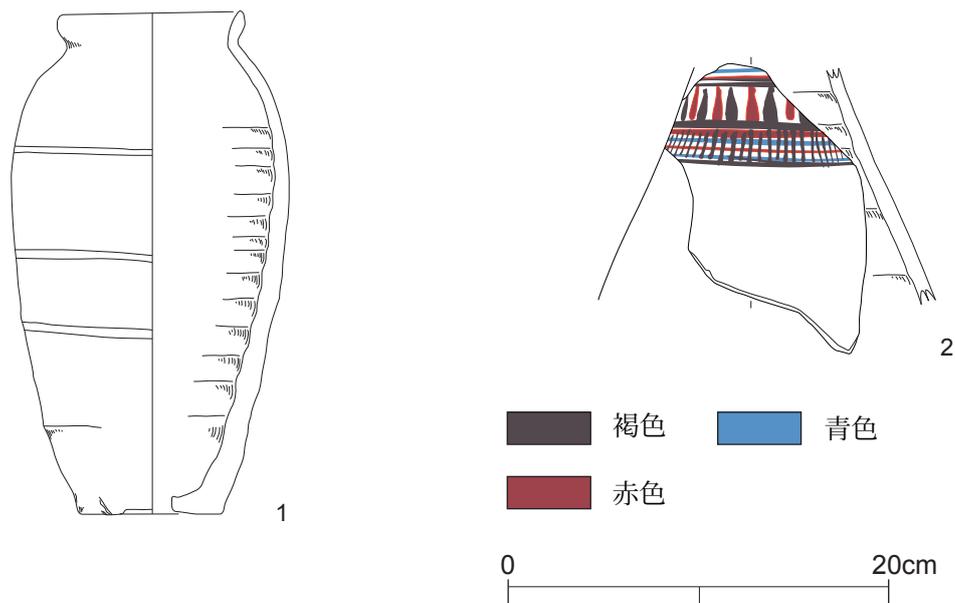


図 44 シャフト 144 出土土器片  
Fig.44 Pottery vessels from Shaft 144

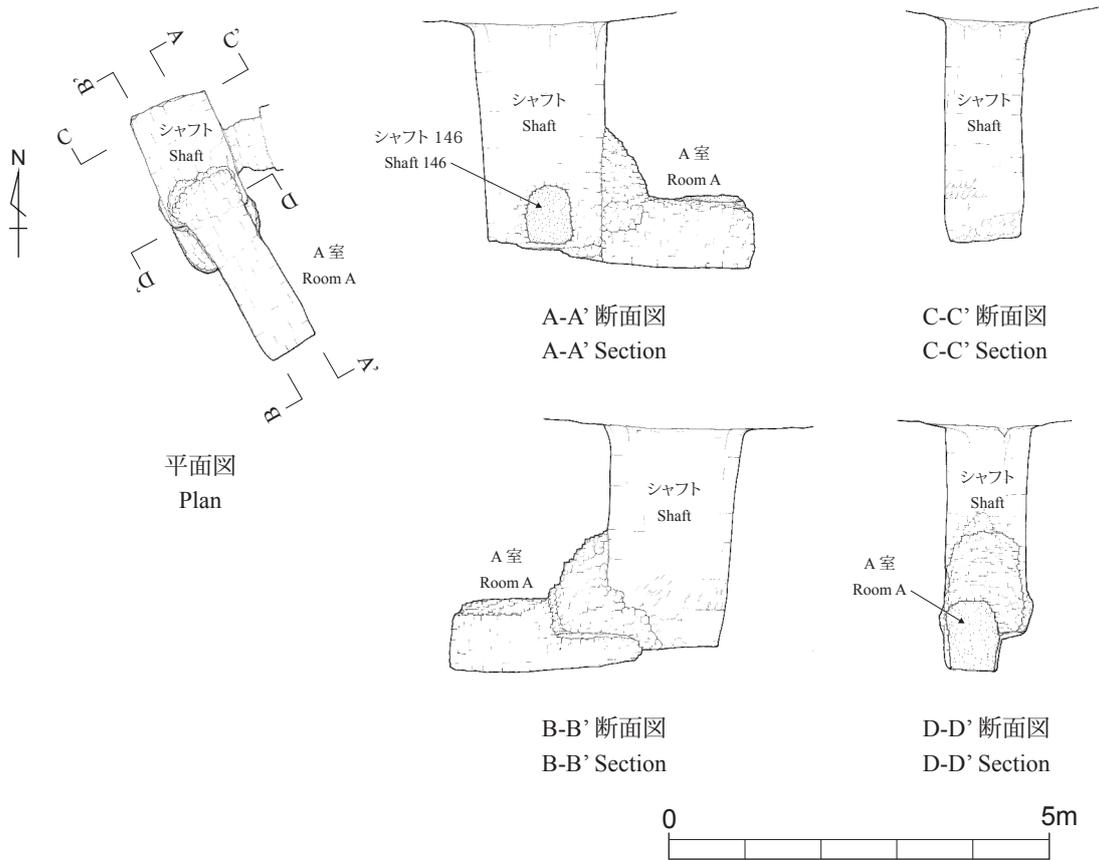


図45 シャフト145 平面・断面図  
Fig.45 Plan and sections of Shaft 145

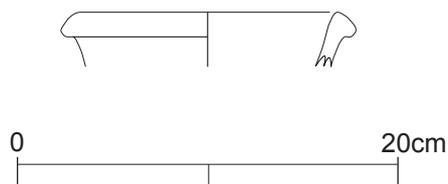


図46 シャフト145 出土土器片  
Fig.46 Pottery vessel from Shaft 145

タフラを含む砂の堆積が続いていた。土器、人骨、木片などが出土しており、A室からは中王国時代のビール壺の口縁部断片や、金箔片などが出土している。

## ②出土遺物（図46）

シャフト145からの出土遺物は極めて少なく、特徴的な土器は図46の1点のみであった。この器形はR. シストルとA. ザイラーによる集成ではビール壺のClass 3bに相当すると考えられ、アメンエムハト3世治世から第13王朝初期に多い器形である（Schiestl and Seiler 2012: 652-656）。

#### 4. おわりに

第24次調査で遺跡北東部を調査した結果、中王国と新王国の両時代で、この遺跡の中でも比較的古い時期の墓が発見された。

中王国時代の墓は夕墓周辺の発掘によって初めて確実な例が発見され、未盗掘を含めた数多くの墓の調査によって、この遺跡における同時代の墓の典型が明らかになってきた。それ以前に調査されたイパイ墓やパシェドゥ墓周辺でもこの典型に合致する遺構は発見されていたものの、新王国時代の墓に比べ埋葬室が小さく遺物も僅少であったため、これらの遺構は未完成と判断されていた<sup>13)</sup>。しかし第22、23次調査で夕墓周辺地区より東の地点でも中王国時代の墓は存在することが確認され、中王国時代の墓域は遺跡の西側にとどまらず、イパイ墓・パシェドゥ墓周辺を含む東側にも広がっていた可能性が指摘されるに至った(吉村他2017: 22)。今期調査の結果、イパイ墓よりも東の地区からも中王国時代の墓が発見されたことで、同時代の墓が遺跡の東側にも存在することが裏付けられた。さらに、北東部の墓はアメンエムハト3世治世から第13王朝初期に年代づけられる墓で占められ、夕墓周辺地区では第13王朝初期や中期の墓が認められることから<sup>14)</sup>、北東部の墓の方が比較的古いと考えられる。既往の研究から、本遺跡に埋葬された人々は、当初は遺跡の東に位置するセンウセレト3世ピラミッド周辺墓地に葬られた王族・高官と関係があった可能性が指摘されている(矢澤・吉村2016: 207-208)<sup>15)</sup>。こうした関係を背景として、センウセレト3世ピラミッドに近い遺跡東部から墓の造営が開始され、西に向かって墓地が発展していった可能性が考えられる。

新王国時代の墓、特にシャフト142は本遺跡でこれまでに確認された墓の中でも最古級に位置付けられる。石製容器の模倣土器や陶製カノポス壺は、ルクソール西岸地域の第18王朝中期の墓から出土した資料との顕著な類似が認められた。新王国時代では少なくともトトメス3世の治世から南と北の2人の宰相がいたと考えられており、北の宰相はメンフィスを拠点に統治を行っていた(Martin 1991: 196-197)。この時期メンフィスは北の重要な政治的拠点として強い影響力を持つようになっており、アメンヘテプ2世やトトメス4世によるメンフィス地域での活動の痕跡は、王による関心の高さを物語っている(Bryan 2000: 241-251, 255-256)。第18王朝中期の政治的な動きを背景として、メンフィス地域への人や物の流入が活発になったことは想像に難くなく、シャフト142からの出土遺物はこうした状況を反映したものである可能性も否定できない。また、ダハシュール北遺跡の新王国時代の活動がどのようにして始まったのかという問題についても、今回の成果は有益な情報を提供するものである。本遺跡における同時代の墓の発見例は少ないため、今後の資料の拡充が望まれる。

#### 謝辞

本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」(研究代表者: 吉村作治、課題番号: 26257010)の助成を受けて実施された。エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーリッド・アル＝エナニー閣下(博士)、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマイル博士、サッカラ査察局のサブリ・ファラグ氏、チーフ・インスペクターのムハンマド・ユーセフ氏およびムハンマド・ヘンダウイ氏、サッカラのセリーム・ハッサン遺物収蔵庫の館長ラガブ・トゥルキ氏、第24次調査の査察官カーリッド・ムハンマド・アブド・アル＝マスケード氏、イスマイル・ムスタファ・イスマイル氏に多大なご支援、ご協力をいただいた(肩書きは調査時のもの)。

ここに記して感謝の意を表したい。

## 註

- 1) 衛星リモートセンシングを応用したダハシュール北遺跡の発見については早稲田大学エジプト学研究所 2003 を参照。第1次から第13次調査にかけての発掘調査の概要と文献については吉村 2011 にまとめられている。以降の調査は、第14次(吉村、近藤、長谷川他 2011)、第15次(吉村、近藤、矢澤他 2011)、第16・17次(吉村他 2012)、第18次(吉村他 2013)、第19次(吉村他 2014)、第22次(Yoshimura et al. 2016a; 吉村他 2016)、第23次(Yoshimura et al. 2016b; 吉村他 2017)となっている。第20・21次は倉庫における遺物整理調査であったため、概要報告はない。中王国時代の埋葬についてはBaba and Yoshimura 2010, 2011、Baba 2014、Baba and Yazawa 2015、Yoshimura and Baba 2015、矢澤・吉村 2016、Yazawa 2017 にまとめられている。
- 2) 第24次調査の隊員構成は次の通りである。隊長:吉村作治、現場主任:矢澤健、考古学班:近藤二郎、山崎世理愛、石崎野々花、有村元春、建築学班:柏木裕之、人類学班:馬場悠男、保存修復:リチャード・ジャスキ、広報:岩出まゆみ、渉外:吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 3) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している(Nordström and Bourriau 1993: 168-182)。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。
- 4) 図4で本文中に言及されなかった土器の胎土は次の通り。図4.1:Nile B2、図4.2:Nile C、図4.3:Nile C、図4.4:Nile C、図4.7:Nile B2、図4.11:Nile B2、図4.13:Nile C、図4.14:Nile B2、図4.16:Nile B2。
- 5) R. シストル(Schiestl)とA. ザイラー(Seiler)のClass 5に相当すると考えられる(Schiestl and Seiler 2012: 596-599)。
- 6) 本文中に言及がなかった土器の胎土は次の通り。図19.3、5-12、14-16:Nile B2、図19.13、17:Nile D、図20.10-14、16:Nile B2、図20.15:不明。
- 7) Court type の典型とされるセネプティシの埋葬の例では、報告書のFig.35.2(Plate XXIX.Aの右から4番目)がシャフト138で発見された杖の本来の形状に近いと推測される(Mace and Winlock 1916: Fig.35.2, Pl.XXIX)。
- 8) 類似する例としては、Schneider 1977, 3.1.1.5があり、第18王朝から第19王朝に年代づけられている。
- 9) チャヌニ墓出土の例は胴部に垂直方向の銘文帯があり、被葬者の名前と称号が書かれているが、シャフト142出土の例には無いという違いはある。
- 10) 図38で本文中に言及されなかった土器の胎土は次の通り。図38.4:Nile B1、図38.5:Nile B2。
- 11) Court type の埋葬でウアスの杖はよく見られる副葬品であり、リシュトのセネプティシ墓(Mace and Winlock 1916: Fig.35.5, pl.XXIX.A, C)、ダハシュールのイタ墓(de Morgan 1903: Fig.105)、ホル王墓(de Morgan 1895: Fig.223)、ヌブヘテプティケレド墓(de Morgan 1895: Fig.253)などが例として挙げられる。
- 12) こうした製作技法はこのタイプでは数多く見られる(c.f. Bader 2002: 39)。
- 13) 例として、第6次調査シャフト28(吉村他 2002: 51)、第8次調査シャフト34(吉村他 2003: 167)が挙げられる。
- 14) 第13王朝初期の例としては、シャフト106(吉村他 2013: 35-41; Baba and Yazawa 2015: 17-20)、シャフト107(吉村他 2012: 53-58; Baba and Yazawa 2015: 14-17)、第13王朝中期の例としてはシャフト53(吉村他 2011; Baba and Yazawa 2015: 20-22)などがある。
- 15) 第24次調査で複数発見されたR. シストルとA. ザイラーによるビール壺のClass 3b、3dに該当する土器が、センウセレト3世北側墓地からも発見されており、時期としても近いことが指摘できる。これらの土器はアメンエムハト3世治世に年代づけられる(Allen 2014)。

## 参考文献

Allen, S.

2014 “Pottery from the Pyramid Complex of Senwosret III and the Middle Kingdom Mastabas at Dahshur 2003-2010 (The Metropolitan Museum of Art, New York)”, *Bulletin de Liaison de Céramique Égyptienne* 24, pp.85-92.

Arnold, Do.

1988 “Pottery”, in Arnold, Di. (ed.), *The South Cemeteries of Lisht, Vol.I: The Pyramid of Senwosret I*, New York, pp.106-149.

Aston, B.

1994 *Ancient Egyptian Stone Vessels: Materials and Forms*, Heidelberg.

2011 “The Pottery”, in Raven, M. J., Verschoor, V., Vugts, M. and van Walsem, R. (eds.), *The Memphite Tomb of Horemheb: Commander in Chief of Tutankhamun V: The forecourt and the area south of the tomb with some notes on the tomb of Tia*, Turnhout, pp.191-252.

2012 “Chapter VII: The Pottery.” in Schneider, H. (ed.), *The Tomb of Iniua in the New Kingdom Necropolis of Memphis at*

- Saqqara*, Belgium, pp.139-217.
- Aston, D.  
 1991 “Section 5: Pottery,” in Raven, M. J. (ed.), *The tomb of Iurudef: The Memphite Officials in the Reign of Ramesses II*, Leiden and London, pp.47-54.  
 2004 “Amphorae in New Kingdom Egypt”, *Ägypten und Levante* XIV, pp.175-214.
- Baba, M.  
 2014 “Intact Middle Kingdom Burial of Senu found at Dahshur North”, in Kondo, J. (ed.), *Quest for the Dream of the Pharaohs: Studies in Honour of Sakuji Yoshimura*, Cairo, pp.35-48.
- Baba, M. and Yazawa, K.  
 2015 “Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom shaft-tombs in Dahshur North”, in Grajetzki, W., and Miniaci, G. (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt*, Middle Kingdom Studies 1, London, pp.1-24.
- Baba, M. and Yoshimura, S.  
 2010 “Dahshur North: Intact Middle and New Kingdom Coffins”, *Egyptian Archaeology* 37 (Autumn), pp.9-12.  
 2011 “Ritual Activities in Middle Kingdom Egypt: A View from Intact Tombs Discovered at Dahshur North”, in Bárta, M., Coppens, F., Krejčí, J., (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, vol.1, Prague, pp.158-170.
- Bader, B.  
 2002 “A Concise Guide to Marl C. Pottery”, *Ägypten und Levante* XII, pp.29-54.
- Bourriau, J., Aston, D., Raven, M.J., van Walsem, R. and Hope, C.  
 2005 *The Memphite Tomb of Horemheb: Commander-in Chief of Tut'ankhamun III*, *The New Kingdom Pottery*, Egypt Exploration Society Excavation Memoir 71, London.
- Brack, An. and Brack, Ar.  
 1977 *Das Grab des Tjanuni: Theben Nr. 78*, Mainz am Rhein.
- Bryan, B.M.  
 2000 “The 18th Dynasty before the Amarna Period”, in Shaw, I (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, Oxford, pp.218-271.
- Cotelle-Michel, L.  
 2004 *Les sarcophages en terre cuite en Égypte et en Nubie: De l'époque prédynastique à l'époque romaine*, Dijon.
- de Morgan, J.  
 1895 *Fouilles à Dahchour: mars-juin 1894*, Vienna.  
 1903 *Fouilles à Dahchour: 1894-1895*, Vienna.
- Dunsmore, A.  
 2014 “Chapter VII: Pottery,” in Raven, M. J. and van Walsem, R. (eds.), *The Tomb of Meryneith at Saqqara*, Turnhout, pp.257-293.
- Giddy, L.  
 1999 *The Survey of Memphis II: Kom Rabi'a: The New Kingdom and post-New Kingdom objects*, London.
- Hayes, W.C.  
 1935 *Royal Sarcophagi of the XVIII Dynasty*, Princeton.  
 1953 *The Scepter of Egypt: A Background for the Study of the Egyptian Antiquities in the Metropolitan Museum of Art*. Vol.I, New York.
- Hope, C.A.  
 1989 *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Burwood.
- Kozloff, A.P.  
 1992 *Egypt's Dazzling Sun: Amenhotep III and His World*, Cleveland.
- Mace, A.C. and Winlock, H.E.  
 1916 *The tomb of Senebtisi at Lisht*, New York.
- Martin, G.T.  
 1989 *The Memphite tomb of Horemheb: Commander-in-chief of Tutankhamûn I: The reliefs, inscriptions, and commentary*, London.  
 1991 *The Hidden Tomb of Memphis: New Discoveries from the time of Tutankhamun and Ramesses the Great*, London.
- Merrileess, R.  
 1968 *The Cypriot Bronze Age Pottery found in Egypt*, Lund.

- Nordström, H.A. and Bourriau, J.  
 1993 “Ceramic Technology: Clay and Fabrics,” in Arnold, Do. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz, pp.143-190.
- Raven, M.J.  
 2001 *The Tomb of Maya and Merit II: Objects and Skeletal Remains*, Leiden and London.  
 2005 *The Tomb of Pay and Raia at Saqqara*, Leiden.  
 2010 “Book of the Dead documents from the New Kingdom necropolis at Saqqara”, *British Museum Studies in Ancient Egypt and Sudan* 15, pp.249-265.
- Rigault, P.  
 2015 “The Canopic Chest of Khakheperreseneb/Iy – Louvre E 17108”, in Grajetzki, W., and Miniaci, G. (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt*, Middle Kingdom Studies 1, London, pp.325-331.
- Rose, P.  
 1996 “The Pottery”, in Strudwick, N. (ed.), *The Tombs of Amenhotep, Khumose, and Amenose at Thebes (Nos. 294, 253 and 254)*, Oxford, pp.166-181.  
 2003 “Ceramics from New Kingdom tombs: recording and beyond”, in Strudwick, N. and Taylor, J. H. (eds.), *The Theban Necropolis. Past, present and future*, London, pp.202-209.  
 2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London.  
 2016 “9: The Ceramics from Shaft I”, in Strudwick, N (ed.), *The Tomb of Pharaoh’s Chancellor Senneferi at Thebes (TT99)*, Vol. I, *The New Kingdom*, Oxford, pp.191-238.
- Schiestl, R. and Seiler, A.  
 2012 *Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom. Vol.I: The Corpus Volume*, Vienna.
- Schneider, H.D.  
 1977 *Shabtis: An introduction to the history of ancient Egyptian funerary statuettes, with a catalogue of the collection of Shabtis in the National Museum of Antiquities at Leiden*, part I-III, Leiden.  
 1996 *The Memphite tomb of Horemheb II: A catalogue of the finds*, Leiden and London.  
 2012 *The Tomb of Iniua in the New Kingdom Necropolis of Memphis at Saqqara*, Turnhout.
- Yazawa, K.  
 2017 “The late Middle Kingdom shaft tombs in Dahshur North”, in Bárta M., Coppens, F. and Krejčí J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2015*, Prague, pp.531-544.
- Yoshimura, S. and Baba, M.  
 2015 “Recent Discoveries of intact tombs at Dahshur North: Burial customs of the Middle and New kingdoms”, in Kousoulis P. and Lazaridis N. (eds.), *Proceedings of the Tenth International Congress of Egyptologists, University of the Aegean, Rhodes, 22-29 May 2008*, *Orientalia Lovaniensia Analecta* 241, pp.541-556.
- Yoshimura, S., Baba, M., Yazawa, K., Jaeschke, S. and Uda, M.  
 2018 “Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North: Discovery, Conservation and X-Ray Analysis”, *The Journal of Egyptian Studies* 24 (in this volume).
- Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Takenouchi, K., Matsunaga, S. and Yamazaki, S.  
 2016b “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-third Season, 2015”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 3, pp.3-22.
- Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Takenouchi, K. and Yamazaki, S.  
 2016a “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-second Season, 2015”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 1, pp.3-19.
- 矢澤 健、吉村作治  
 2016 「エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について—遺構の形状・規模・分布の分析—」、『オリエント』第58巻第2号、pp.196-210.
- 吉村作治  
 2011 「I. はじめに」、『エジプト学研究』別冊第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.9-14.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一  
 2002 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—2000年 第6次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第14巻第1号、pp.49-60.

- 2003 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—2002 年 第 8 次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第 16 巻第 1 号、pp.165-177.  
吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子
- 2011 「Ⅱ. 第 14 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-60.  
吉村作治、近藤二郎、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子
- 2011 「Ⅲ. 第 15 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、早稲田大学エジプト学会、pp.61-83.  
吉村作治、馬場匡浩、近藤二郎、西本真一、柏木裕之、矢澤 健
- 2010 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 12 次・第 13 次発掘調査—」、『エジプト学研究』第 16 号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-46.  
吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、竹野内恵太、山崎世理愛
- 2016 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 22 次調査—」、『エジプト学研究』第 22 号、日本エジプト学会、pp.91-112.  
吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、竹野内恵太、松永修平、山崎世理愛
- 2017 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 23 次調査—」、『エジプト学研究』第 23 号、日本エジプト学会、pp.3-25.  
吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、馬場匡浩、西本真一、柏木裕之、秋山淑子
- 2012 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第 16 次・第 17 次発掘調査—」、『エジプト学研究』第 18 号、早稲田大学エジプト学会、pp.21-67.  
吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、西本真一
- 2013 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第 18 次発掘調査—」、『エジプト学研究』第 19 号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-43.
- 2014 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—第 19 次発掘調査—」、『エジプト学研究』第 20 号、早稲田大学エジプト学会、pp.15-43.  
早稲田大学エジプト学研究所 編
- 2003 『ダハシュール北〔Ⅰ〕—宇宙考古学からの出発—』、Akht Press.

エジプト学研究 第24号

2018年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.24

Published date: 31 March 2018

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist